１０．共生社会コンファレンス

１０－１　開催プロセス

共生社会コンファレンスの開催は文部科学省と一般財団法人福祉教育支援協会が協働で方針を確認し、東京大学大学院教育学研究科に協力を要請し、会場及び内容に関してもテーマ設定から話し合うこととし、共催という形で 3 者が合意し開催に向けての準備が具体的に始まった。

日程及びテーマと趣旨の素案を固め、「シンポジウム」「ワークショップ」「分科会」というプログラムの大枠を決めた上で、ワークショップと各分科会のテーマ設定を検討し、コーディネーターへのお願いは文科省と福祉教育支援協会で実施した。ワークショップの方向性として「当事者体験」「ヒューマンライブラリー」「当事者と学びあう音楽プログラム」、分科会では「社会教育」「喫茶コーナーの取組」「『高等』教育でのインクルージョン」「重度障がい者へのアウトリーチ」「当事者研究での学び」をテーマ設定した。

実行委員会のメンバーは以下であり、8 月 28 日を第一回目の委員会を開催し、1 月 27 日の 5 回まで開催した。

（1）実行委員会メンバー

小国喜弘（東京大学教育学部教授）
牧野篤（東京大学教育学部教授）
星加良司（東京大学教育学部准教授）
小林美保（文科省室長）
津田英二（神戸大教授）
小林繁（明治大学教授）
須藤昌俊（墨田区教育委員会社会教育主事）
三浦修平（世田谷区教育委員会社会教育主事）
兼松忠雄（全国喫茶コーナー交流会事務局長）
下川政洋（地域ケアサポート研究所理事）
綾屋紗月（東京大学先端科学技術研究センター研究員）
飯野順子（地域ケアサポート研究所理事長）
照山絢子（筑波大学准教授）
井口啓太郎（文科省）
峯浩之（文科省）
引地達也（一般財団法人福祉教育支援協会）
事務局
一般財団法人福祉教育支援協会
杉本、渡辺、河辺、大槻、加藤、松本

（２）実行委員会の開催

第一回　2019 年 8 月 28 日　東京大学

第二回　2019 年 9 月 30 日　文科省

第三回　2019 年 10 月 29 日　東京大学

第四回　2019 年 11 月 20 日　東京大学

第五回　2020 年 1 月 27 日　東京大学

１０－２　広報と受付

実行委員会での協議を経て、第一弾のチラシを発行し、関係機関への周知を開始した。2 度の改版した後に 1 月中旬に最終版が確定した。ホームページ上で内容の公開を行い、参加申し込みの受付は 2019 年 12 月 25 日に開始した。

一方で福祉教育支援協会の引地は 2020 年 1 月から関東甲信越ブロックの対象地域にあるすべての都県の教育委員会を訪問し今回のテーマ設定の経営や共生社会コンファレンスの趣旨を説明し、積極的な参加を呼び掛けた。特にシンポジウムのタイトルである「障がい者発の学びの提起」が重要なコンセプトであり、健常者中心ではない視点を共有してほしいと強調した。訪問したのは以下である。

・新潟県教育委員会（知事部局同席）

・山梨県教育委員会（知事部局も訪問）

・群馬県教育委員会

・千葉県教育委員会

・神奈川県教育委員会

・埼玉県教育委員会

・長野県教育委員会（知事部局同席）

・栃木県教育委員会（知事部局、外部識者同席）

・茨城県教育委員会

またマスメディアの報道では東京新聞がコンファレンス開催の告知記事を 2 月 1 日付朝刊に掲載した。

チラシ最終版（表）

文部科学省事業

共に学び、生きる共生社会コンファレンス IN 関東甲信越ブロック

障害理解の促進、障害者の学びの場の担い手の育成、
生涯にわたる学びの場の拡大に向けて

2020/2/14(金)10時～17時15分

場所：東京大学（本郷キャンパス 伊藤国際学術研究センター等）

開催趣旨

障害者権利条約では、障害者の教育に関する権利を機会の均等を基礎として実現する観点から、障害者を包容する生涯学習の環境を確保することを締約国に求めている（24 条）。これを踏まえ、誰もが相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現に向けて、障害の有無等にかかわらず学びあえる場が広く整備されていく必要がある。

こうした問題意識に基づき、本コンファレンスでは、多様な人々が集い、対話・交流するシンポジウム及び分科会等を通じて、以下の目的の達成を目指す。第一に、障害者の参加を妨げている社会的障壁や、その解消のための方法について理解を深める（障害理解の促進）。第二に、障害の有無にかかわらず必要な学びが得られる環境を整えるための工夫や考え方の共有を図る（障害者の学びの場の担い手の育成）。第三に、障害者本人の経験やニーズが源泉となるような新しい学びあいの場と豊かな関係性を地域社会に創り出す取組を推進する（障害者の生涯にわたる学びの場の拡大）。

プログラム

●シンポジウム<障害者発・新しい学びの提起ー「健常者」中心の学びを超えて>

登壇者：津田英二氏（コーディネーター・神戸大学）
星加良司氏（東京大学）
牧野篤氏（東京大学）
引地達也氏（シャローム大学校）

●歌の披露<第一回「ココロの詩」最優秀作品「なりたい」>

歌唱：逢川まさき／演奏：ピアノコーラスグループ Psalm（サーム）

※「ココロの詩」は障がいなどで生きづらさを抱えた方からの詩作品の募集コンテストです。最優秀作品は大阪市の就労継続支援事業所に通う稲葉正幸さんの詩作品でした。

●ワークショップ ※ワークショップ・分科会の詳細は裏面参照

●分科会<共通テーマ：「つながる」からはじめよう>

■参加申込みは下記サイトにて受付中■ ※「共生社会コンファレンス」で検索でも可
当コンファレンス特設サイト URL→https://www.kyoseishakai-conference.com/

<主催>一般財団法人福祉教育支援協会、文部科学省 <共催>東京大学大学院教育学研究科
<お問合せ先>一般財団法人福祉教育支援協会
電話：04-2968-8875 ／ FAX：04-2997-5181 ／メール：info@wess.or.jp ／ URL：http://wess.or.jp/

チラシ最終版（裏）

コンファレンスの1日の流れ

●10:00-10:30	オープニング　※主催者挨拶、文部科学省趣旨説明
●10:30-10:50	歌の披露　〈第一回「ココロの詩」最優秀作品「なりたい」〉
●11:00-12:15	シンポジウム　〈障害者発・新しい学びの提起－「健常者」中心の学びを超えて〉
●12:30-13:50	ワークショップ　※昼休憩と並行して3つの体験ワークショップを開催
●14:00-16:00	分科会　※5つのテーマ別分科会を開催／オプショナルツアー「東京大学散策」（14:00-15:00）も選択可
●16:15-17:15	クロージングセッション　※各ワークショップ・分科会の内容共有とまとめ

ワークショップ / プログラム内容紹介

ワークショップ

1．「バリアフル・レストラン」を考える　【コーディネーター】星加良司氏（東京大学）

車いすを利用する人が多数派の世界があったら…。そのような架空の世界のレストランを体験しながら、「障害」と「バリア」について考えます。

●定員：12名 ×2回　●協力：公益財団法人日本ケアフィット共育機構

2．ヒューマンライブラリーへようこそ　【コーディネーター】照山絢子氏（筑波大学）

人を「本」として貸し出す図書館に、遊びに来てみませんか。お好きな「本」を選んで、少人数で 30 分間の対話の時間を過ごすことができます。デンマーク発の、マイノリティへの先入観や偏見を低減するための実践であるヒューマンライブラリーを、ぜひご体験ください。

3．音楽でつながる体感ワークショップ　【コーディネーター】ピアノコーラスグループ Psalm（サーム）

優れたコミュニケーションツールである音楽を通じて、コミュニケーションにおける非言語情報の重要性と伝達力を体感するワークショップ。プロミュージシャンの歌声と演奏で直接感覚に訴える内容は、正に「知る」ではなく「わかる」学びの体験となっています。

分科会

1．社会教育が取り組む生涯学習支援　【コーディネーター】小林繁氏（明治大学）

昭和 30 年代後半から、学校を卒業した障害者の学びの場として、各区市町村の教育委員会により、障害者青年学級が開設されてきました。本分科会では、世田谷区と国分寺市の事例報告から、障害者青年学級の現状を学ぶとともに、これからの社会教育における障害者の学習支援のあり方を考えます。

2．「高等」教育におけるインクルージョン　【コーディネーター】津田英二氏（神戸大学）

特別支援学校専攻科、福祉型専攻科、高等教育機関が実施するオープンカレッジ、障害学生支援など、多様な形態で行われている中等後教育について、それらの実践が障害者の生涯学習に貢献できる可能性と、高等教育機関や地域社会に与える影響について議論します。

3．カフェを介した『共生の学び』の実践　【コーディネーター】兼松忠雄氏（全国喫茶コーナー交流会）

「まち全体をキャンパスに」と図書館やスキー場、貸し切り列車でのカフェを展開するお店、お店を飛び出し地域での音楽活動をするお店、40 年近く青年たちが障害者と営むお店と、ユニークな「喫茶店」を展開する 3 事例を通して、カフェを通じた「共生の学び」の姿とその可能性について学ぶ場とします。

4．エンパワーメントに向けた学びのアウトリーチ　【コーディネーター】下川和洋氏（地域ケアさぽーと研究所）

特別支援学校を卒業した後も重度の障害者が自宅等で学べるよう、訪問学習の機会を提供する動きが広がりつつあります。本分科会では、前半に各事業所等の実践報告、後半は「重症心身障害児者の生涯学習への期待～本人の思い、家族の願い～」をテーマにそれぞれの立場で語ります。

5．当事者研究がもたらす学び　【コーディネーター】綾屋紗月氏（東京大学）

当事者研究を知らない人、当事者研究を少し知っているけれど現場への導入の仕方がわからない人、当事者研究を検討している人などを対象に、「当事者が仲間と共に言葉を生み出すためのツール」としての当事者研究について説明し、事例として自閉スペクトラム症者と依存症者の当事者研究を紹介します。

参加申込みは当コンファレンス特設サイトにて受付中

１０－３　プログラム構成

実行委員会での協議を経て、以下のプログラムが確定された。開催された概要は以下である。

（１）テーマと趣旨

共に学び、生きる共生社会コンファレンス

～障害理解の促進、障害者の学びの場の担い手の育成、学びの場の拡大に向けて～

■開催趣旨

障害者権利条約では、障害者の教育に関する権利を機会の均等を基礎として実現する観点から、障害者を包容する生涯学習の環境を確保することを締約国に求めている（24 条）。これを踏まえ、誰もが相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現に向けて、障害の有無等にかかわらず学びあえる場が広く整備されていく必要がある。

こうした問題意識に基づき、本コンファレンスでは、多様な人々が集い、対話・交流するシンポジウム及び分科会等を通じて、以下の目的の達成を目指す。

第一に、障害者の参加を妨げている社会的障壁や、その解消のための方法について理解を深める（障害理解の促進）。第二に、障害の有無にかかわらず必要な学びが得られる環境を整えるための工夫や考え方の共有を図る（障害者の学びの場の担い手の育成）。第三に、障害者本人の経験やニーズが源泉となるような新しい学びあいの場と豊かな関係性を地域社会に創り出す取組を推進する（障害者の学びの場の拡大）。

■実施体制

主催：文部科学省、一般財団法人福祉教育支援協会

共催：東京大学大学院教育学研究科

運営事務局：一般財団法人福祉教育支援協会

■会場

東京大学（伊藤国際学術研究センター、教育学部教室など）

参加者想定：200～300 名（各分科会の参加者は 30～50 名）

（2）プログラム内容

開催当日に配布したプログラムは以下である。

共に学び、生きる共生社会コンファレンス IN 関東甲信越ブロック

障害理解の促進、障害者の学びの場の担い手の育成、
生涯にわたる学びの場の拡大に向けて

プログラム

2020/2/14（金）10時～17時15分

場所：東京大学（本郷キャンパス 伊藤国際学術研究センター等）

＜主催＞一般財団法人福祉教育支援協会、文部科学省
＜共催＞東京大学大学院教育学研究科
＜お問合せ先＞一般財団法人福祉教育支援協会
〒359-0037
埼玉県所沢市くすのき台 3-18-4 所沢 K・S ビル 3F（本部）
電話：04-2968-8875 ／ FAX：04-2997-5181
メール：info@wess.or.jp ／ URL：http://wess.or.jp/

開催趣旨

障害者権利条約では、障害者の教育に関する権利を機会の均等を基礎として実現する観点から、障害者を包容する生涯学習の環境を確保することを締約国に求めています（24 条）。これを踏まえ、誰もが相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現に向けて、障害の有無等にかかわらず学びあえる場が広く整備されていく必要があります。

こうした問題意識に基づき、本コンファレンスでは、多様な人々が集い、対話・交流するシンポジウム及び分科会等を通じて、以下の目的の達成を目指す。第一に、障害者の参加を妨げている社会的障壁や、その解消のための方法について理解を深めます（障害理解の促進）。第二に、障害の有無にかかわらず必要な学びが得られる環境を整えるための工夫や考え方の共有を図ります（障害者の学びの場の担い手の育成）。第三に、障害者本人の経験やニーズが源泉となるような新しい学びあいの場と豊かな関係性を地域社会に創り出す取組を推進します（障害者の生涯にわたる学びの場の拡大）。

会場

東京大学＜本郷キャンパス＞

会場①：伊藤国際学術研究センター地下２階

●総合受付
●伊藤謝恩ホール（メイン会場）：オープニング／歌の披露／シンポジウム／分科会４／クロージングセッション
●多目的ホール：ワークショップ３／分科会５

会場②：教育学部棟

●１階…109：分科会３ ／ 158：分科会１
155(＝ラウンジ)：事務局
●２階…258(＝第一会議室)：ワークショップ２
●３階…357＆358：分科会２

会場③：赤門総合研究棟

●２階…200：ワークショップ１

※東大散策ツアー：伊藤国際学術研究センター１階玄関前

タイムテーブル

●10:00-10:30	オープニング　※主催者挨拶、文部科学省趣旨説明
●10:30-10:50	歌の披露　〈第一回『ココロの特』最優秀作品「なりたい」〉
●11:00-12:15	シンポジウム　〈障害者発・新しい学びの提起ー「健常者」中心の学びを超えて〉
●12:30-13:50	ワークショップ　※昼休憩と並行して３つの体験ワークショップを開催
●14:00-16:00	分科会　※５つのテーマ別分科会を開催／オプショナルツアー「東京大学散策」(14:00-15:00)
●16:15-17:15	クロージングセッション　※各ワークショップ・分科会の内容共有とまとめ

ごあいさつ

文部科学省　総合教育政策局　男女共同参画共生社会学習・安全課
障害者学習支援推進室長　小林美保

文部科学省では、障害のある方々が一生涯にわたり自らの可能性を追求するとともに、地域の一員として豊かな人生を送ることができるよう、多様な学習活動の充実に向けた取組を進めています。「知らなかったことを知ること、できなかったことができるようになること、そして人や社会とつながることは、人間の根源的な喜びである。」これは、「障害者の生涯学習の推進方策について―誰もが、障害の有無にかかわらず共に学び、生きる共生社会を目指して―」（平成31年3月学校卒業後における障害者の学びの推進に関する有識者会議）の一文ですが、障害のある方々にとって、環境や意識、情報などの面で、まだまだ多くの社会的障壁があり、そうした機会を十分に得られない状況にあります。

こうしたことを踏まえ、文部科学省としては、誰もが学びたいときに、いつでも学べる社会、障害の有無にかかわらず共に学び、生きる共生社会の実現を目指し、各地で先進的な取組を進めている自治体、大学、団体の皆様とともに、令和元年度より「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」を全国6ブロックにて開催することとしました。

本コンファレンスでは、障害のある方々本人による学びの成果発表等や、学びの場づくりに関する好事例の共有、生涯学習支援に関する研究協議等を通じて、社会モデルとしての障害理解の促進や、学びの場の担い手の育成、ひいては障害のある方々の学びの場の拡大、学ぶ環境の全国的な整備につなげていくことを目指しています。

共生社会の実現や、障害のある方々の生涯学習を推進していくためには、本日御参加の皆様をはじめとして、地方自治体や大勢の方々の積極的な活動が大変重要です。皆様には、これまで培ってこられた知見や経験を生かし、積極的に実践的知見を共有・発信・交流いただくとともに、今後とも各地域での障害者の生涯学習支援に携わる人々の支援や育成にもお力添えいただきますよう、お願い申し上げます。

歌の披露

2019 年度、一般財団法人福祉教育支援協会が行う「ケアメディア推進プロジェクト」は、障害や疾患、その他様々な原因で「生きづらさ」を感じている方々、その家族や友人、関係者から「ココロの詩」を公募しました。その結果、大阪市の程嶋正幸さん作「なりたい」が第1回最優秀作品に選ばれ、作品は歌手逢川まささんが歌う「なりたい」として全国で発売されています。

今回は逢川さんの歌唱とサームによる演奏とコーラスで披露いたします。

＜「ココロの詩」紹介サイト URL＞http://caremedia.link/news/20191109.html　※現在、第２回の作品募集中

●タイトル：「なりたい」（作詞：程島正幸さん・双極性障害等）

◇歌：逢川まさき

熊本県八代市出身。2008 年日本クラウンよりデビューする。心に届くメッセージを伝えたいという思いからジャンルにとらわれない音楽を届けている。

＜逢川まさき紹介 URL＞http://www.crownrecord.co.jp/artist/aikawa/whats.html

◇演奏：ピアノコーラスグループ Psalm（サーム）

早稲田大学アカペラサークル出身のリーダー Hama を中心に 2005 年に結成。Hama の個性豊かなボーカルと Kengo の美しいピアノの旋律が創りだす世界観は多くのファンを魅了している。

＜サーム紹介 URL＞https://www.psalm-web.com/

※「なりたい」の歌詞は別紙をご覧ください。

シンポジウム

障害者発・新しい学びの提起ー「健常者」中心の学びを超えて

障害者の学びの場を広げていこうという今回のコンファレンスのねらいについて、基本的な考え方を整理します。特に、障害者が学びの主人公になるというのは、健常者の学びの中に混ぜてあげるというだけではないのだということ、学校型の学び以外にもいろいろな学びの形があるということに焦点を当てます。

障害者の学びの場が広がっていくということに、どんな「新しさ」を発見していくことができるのか、考えていきたいと思います。

＜登壇者＞

津田英二氏（神戸大学）

神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授、神戸大学附属特別支援学校校長。専門は社会教育論、生涯学習論、インクルージョン論。著書に『物語としての発達／文化を介した教育』等。

牧野篤氏（東京大学）

東京大学教育学研究科教授。専門は社会教育学、生涯学習論。文部科学省中央教育審議会生涯学習分科会臨時委員を務める。著書に『社会づくりとしての学び：信頼を贈りあい、当事者性を復活する運動』等。

星加良司氏（東京大学）

東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センター准教授。専門は社会学、障害学。障害学会理事、『障害学研究』編集委員長。著書に『障害とは何か』。

引地達也氏（シャローム大学校）

支援が必要な人の学びの場、シャローム大学校学長。通学、訪問、遠隔で講義を展開する。就労移行支援事業所施設長を経てシャロームネットワーク総括、研究領域はケアとメディアの融合。

ワークショップ１

「バリアフル・レストラン」を考える

車いすを利用する人が多数派の世界があったら…。そのような架空の世界のレストランを体験しながら、「障害」と「バリア」について考えます。

●定員：12名 ×2回　●協力：公益財団法人日本ケアフィット共育機構

＜公益財団法人日本ケアフィット共育機構について＞

「サービス介助士」「防災介助士」「認知症介助士」などの資格や「ケアフィット・ファーム」に代表される障がいの有無に関わらず共働できる場の提供、ボランティア活動のコーディネイトなどを行っています。

＜コーディネーター＞

星加良司氏（東京大学）

プロフィールは上記参照

ワークショップ2

ヒューマンライブラリーへようこそ

ヒューマンライブラリーは、2000 年にデンマークの若者たちが、北欧最大の音楽祭であるロスキレ・フェスティバルで始めた「人を貸し出す図書館」です。障害者、ホームレス、セクシャルマイノリティなど、社会のなかで誤解や偏見を受けやすい人々が「本」になり、一般「読者」と対話をするこの「図書館」は、対話を通してより多様性に開かれた寛容な社会の実現を目指す実践で、現在では日本を含め世界 70 か国以上で開催されています。今回は、さまざまな種別の障害を持つ方々を「本」としてそろえました。

「あらすじ(自己 PR 文)」を参考にお好きな「本」を選んで、少人数で 30 分間の対話の時間をお過ごしください。きっと、新しい学びと発見に満ちた濃密な時間になることと思います。また、ヒューマンライブラリーを開催するための実践的なノウハウをご紹介する資料も、お持ち帰りいただけます。

＜コーディネーター＞

照山絢子氏（筑波大学）

筑波大学図書館情報メディア系助教。2016 年より国内のヒューマンライブラリーに関する研究に従事。

ワークショップ3

音楽でつながる体感ワークショップ

「伝える力」と「繋がる力」という面において、音楽はとても優れたコミュニケーションツールになり得ます。そんな音楽の力を使った参加型・体感型のワークショップで、コミュニケーションにおける非言語情報の重要性と伝達力を体感し、学びます。

具体的には、同じ歌詞（言語情報）を、違うハーモニー（非言語情報）で歌うと、感じ方には、どのような変化があるか。という “音楽が持つ伝える力” を利用した実験で、非言語情報の伝達力を体感するプログラムや、演奏を通じて参加者が一つに繋がる体験ができるコミュニケーションプログラムを予定しています。知的障害者の学びのコンテンツとしても機能することを目的として開発された本プログラムは、プロのミュージシャンによる本物の歌声と演奏により、直接感覚に訴える内容で、正に「知る」でなく「わかる」学びの体験となっています。

●演奏：ピアノコーラスグループ Psalm (サーム)

＜コーディネーター＞

河辺勝久（一般財団法人福祉教育支援協会）

就労移行支援事業所シャローム和光施設長。自身のバンド活動経験とシャローム流コミュニケーション支援を掛け合わせ、独自のコミュニケーションプログラムを開発、実践。

分科会１

社会教育が取り組む生涯学習支援

東京都では、昭和 30 年代後半から、学校を卒業した障害者の学習の場として、各区市町村の教育委員会により障害者青年学級が開設されてきました。活動内容は学級ごとに異なり、教養、文化、スポーツ、レクリエーションなど多岐にわたっています。本分科会では、世田谷区と国分寺市の２つの自治体からの事例報告をもとに障害者青年学級の現状を共有するとともに、参加者相互の対話から社会教育における障害者の学びの未来について考えることを目的とします。世田谷区は、教育委員会主催でスタッフと協働しながら、障害の種別、程度や参加の仕方に基づいて、「いずみ学級」、「けやき学級」、「たんぽぽ学級」という 3 つの学級を運営しています。そのうち、知的障害者を対象とした「いずみ学級」を中心に報告いたします。

●事例発表者：増本佐千子氏（国分寺市教育委員会公民館課 恋ケ窪公民館）

●事例発表者：石田智彦氏（国分寺市教育委員会公民館課 もとまち公民館）

●事例発表者：三浦修平氏（世田谷区教育委員会事務局生涯学習・地域学校連携課）

＜コーディネーター＞

小林繁氏（明治大学）

専攻は社会教育。ノーマライゼーションの視点から障害をもつ人の学習・文化活動や障害をもつ人が働く喫茶コーナーなどの研究を進めてきた。

分科会２

「高等」教育におけるインクルージョン

障害者の生涯学習を支援する社会資源として、高等教育機関に期待される役割は小さくありません。しかし、従来高等教育機関の多くは、ゆっくり学ぶ人、合理的配慮を必要とする人への教育機会提供にあまり積極的ではありませんでした。障害者差別解消法施行以降、障害学生支援の動きは活発になりましたが、いまだに高等教育機関のインクルージョンは緒についたばかりと言ってよいでしょう。

一方、学校卒業後にも継続して学びたいという、知的障害者をはじめとするゆっくり学ぶ人たちの声は、年々高まっています。学びの場から最も遠ざけられてきた人たちのこうした声に応えようとする取り組みも散見されるようになってきました。中等後教育の機会提供には、従来の高等教育機関への正規学生としての受け入れだけでなく、特別支援学校専攻科、社会福祉施設で取り組む福祉型専攻科、高等教育機関が実施するオープンカレッジや公開講座など、多様な形態があります。本分科会では、こうした実践にスポットを当て、「高等」教育におけるインクルージョンが障害者の生涯学習に貢献できる可能性と、高等教育機関や地域社会に与える影響の両側面について考えます。

●事例発表者：久保田健氏（KINGO カレッジ）　●事例発表者：川口信雄氏（ゆたかカレッジ横浜キャンパス）

●事例発表者：日戸由刈氏（相模女子大学）

＜コーディネーター＞

津田英二氏（神戸大学）

プロフィールはＰ４参照

分科会３

カフェを介した「共生の学び」の実践

東京都国立市で障害者と青年たちが営業する喫茶店「わいがや」ができてから 40 年近く、今では「障害者が働く喫茶店」は全国に 900 店以上に広がっています。この分科会では、「まち全体をキャンパスに」と、図書館やスキー場、はたまた貸し切り列車でのカフェを展開する総合支援学校、音楽活動と手芸品制作及びカフェでの飲食業をメーンにしながら、地域での音楽活動をする福祉事業所、そして成人式をきっかけとして、公民館という場所で 40 年近く、青年たちが障害者と「喫茶コーナー」を営むお店と、ユニークな活動を展開する３つの「喫茶店」の事例を通じ、カフェを通じた「共生の学び」の姿とその可能性について学ぶ場とします。

●司会：杉野聖子氏（江戸川学園おおたかの森専門学校）
●事例発表者：川沼正憲氏（新潟県南魚沼市立総合支援学校 教頭）
●事例発表者：服部誠氏（NPO 法人 Music of Mind 理事長）
●事例発表者：入山頌氏／比嘉健太氏（国立市公民館「喫茶わいがや」）

＜コーディネーター＞

兼松忠雄氏（明治大学 講師／全国喫茶コーナー交流会 事務局長）

自治体職員として 41 年、主に社会教育、子ども支援等に従事。現在は、障害者が働く「喫茶コーナー」の広がりを通じた、共生社会の実現に向けて活動。

分科会４

エンパワーメントに向けた学びのアウトリーチ - 在宅、施設、病院等へ「学び」を広げるために -

平成 29 年 4 月 7 日、松野文部科学大臣はメッセージ「特別支援教育の生涯学習化に向けて」を発信しました。大臣が都内肢体不自由特別支援学校を見学された際に、重度障害のあるお子さんのいる保護者から、学校卒業後に生活が一変することへの不安と学びの継続の必要性を聞いたのが、このメッセージを発するきっかけになったと聞きます。

重度の障害や病気のために通学・通所等が困難な場合、アウトリーチ型の支援が必要です。学校教育には、障害や病気等で学校に通えない場合、訪問教育という学習形態があります。就学前には、平成30年度から居宅訪問型発達支援が創設されました。しかし学校卒業後には生涯学習に類する国の制度は存在しません。最近になって訪問学習の機会を提供する動きが広がりつつあります。本分科会では、前半に各事業所等の実践報告、後半は「重症心身障害児者の生涯学習への期待～本人の思い、家族の願い～」をテーマにそれぞれの立場で語っていただきます。

●実践報告者：名取瀬子氏（日野市障害者訪問学級）／栗山弘子氏（ＮＰＯ法人かすみ草 いるか）／佐藤友哉氏（訪問カレッジ@希林館 学生）●鼎談登壇者：飯野順子氏（NPO 法人地域ケアさぽーと研究所 理事長）／安部井聖子氏（東京都重症心身障害児（者）を守る会 会長）／中石有美氏（東京都立東部療育センター 医療ソーシャルワーカー）

＜コーディネーター＞

下川和洋氏（NPO 法人地域ケアさぽーと研究所 理事）

1988 年から 24 年間肢体不自由特別支援学校に勤務。現在、ＮＰＯ法人地域ケアさぽーと研究所の他、大学等の非常勤講師を勤める。

分科会５

「当事者研究」がもたらす学び - 仲間と共に自分の経験を言葉にする -

本分科会では、当事者研究を知らない人、障害当事者の生涯学習のツールとして当事者研究を検討している人、当事者研究を少し知っているけれど現場への導入の仕方がわからない人などを対象に、「当事者が仲間と共に言葉を生み出すためのツール」としての当事者研究について説明し、事例として、自閉スペクトラム症者と依存症者の当事者研究を紹介します。このたび主に事例紹介を担当するダルク女性ハウスは、女性の薬物依存症者のための回復施設であり、当事者スタッフが中心となって運営されています。いつの時代も障害は社会を反映したものとして出現しますが、依存症もまた社会と連動しており、同じ症状名だとしても実際に現場にやってくる新しいメンバーの傾向は変化していきます。その結果、古いメンバーが蓄積してきた文化・知恵だけでは対応できない「トラブル」や「謎」が発生します。このような時、テーマを自由に設定し、既存のプログラムでは話せない苦労について、新たに言葉を紡ぎ出していく当事者研究が効果を発揮しています。今回はダルク女性ハウスの新しいメンバーに「怒り」についての当事者研究をご報告いただく予定です。

●事例発表者：るね／マァー／そらジロー（ダルク女性ハウス）

＜コーディネーター＞

綾屋紗月氏（東京大学先端科学技術研究センター）

自閉スペクトラム。東京大学先端科学技術研究センター特任研究員。成人発達障害者の当事者研究会を主催。

東大散策ツアーについて

歴史的モニュメントを巡る

1877 年に設置された日本国内で初の近代的な大学である東京大学には、日本の近現代史を象徴するモニュメントが数多くあり、ツアーガイドが皆さまをご案内します。

●集合場所：伊藤国際学術研究センター１階玄関前

●集合時間：14 時

＜ツアーガイド＞

田中瑛（東京大学）

東京大学大学院情報学環博士課程、シャローム大学校研究員。

※ツアーマップは別紙をご覧ください。

物販事業所一覧

福祉作業所等が作成したハンドメイドアクセサリーや雑貨、当コンファレンスに関連する書籍の販売、さらにバルーンアートの実演等を、個性が光る７つの福祉事業所が行います。

①就労移行支援事業所シャローム和光 埼玉県和光市丸山台 1-10-6 志幸 21 ビル７階 /TEL:050-6865-6816

②就労継続支援 B 型事業所 abeam 東京都文京区千石 4-37-4 ウィスタリア千石 1 階 /TEL:03-3945-2195

③就労継続支援 B 型事業所ててたりと 埼玉県川口市上青木西 5-25-17/TEL:048-423-4858

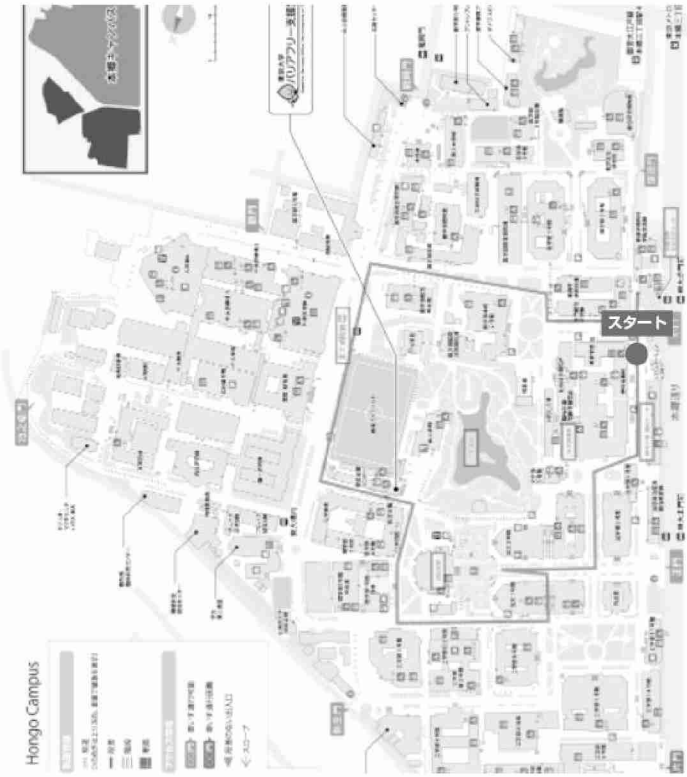
④就労継続支援 B 型事業所ひあしんす城北 東京都板橋区小茂根 4-18-14/TEL:03-3956-9521

⑤障害者支援施設リアン文京 東京都文京区小日向 2-16-15/TEL:03-5940-2822

⑥就労継続支援 B 型事業所工房わかぎり 東京都文京区春日 2-19-3/TEL:03-3812-3417

⑦本郷福祉センター若駒の里 東京都文京区本駒込 4-35-15 勤労福祉会館 2 階 /TEL:03-3823-8091

東大散策ツアーマップ



主催団体：一般財団法人福祉教育支援協会について

平成 27 年に法人設立とともにコミュニケーションを重視したプログラムで支援する就労移行支援事業所シャローム所沢（埼玉県所沢市）開設。平成 28 年に同和光市、令和元年に同さいたま市にそれぞれ事業所設立。また就労支援に関して企業側の啓蒙活動の活発化に向けて、障がい者雇用推進センター（東京都中央区）、障がい者マッチングの活性化に向けて職業紹介事業所シャローム日本橋（同）を設立した。平成 28 年夏から啓蒙媒体として季刊『ケアメディア』を発行、全国の約 60 事業所の広報媒体として機能（2020 年新書号は 33,000 部発行）している。さらに就労支援の実践から「学び」の必要な若者等への対応を研究し、シャローム大学校（埼玉県和光市）を開設し、通学型、訪問型、遠隔型で学びへのニーズに応える取組を実践。活動は 2019 年度の日本特殊教育学会、日本 LD 学会等で発表。発達支援研究所等の他地域の福祉型専攻科や研究機関とも連携している。

第１回ココロの詩 最優秀賞 受賞作「なりたい」

「なりたい」

花になりたいのです
生まれ変わったら　こんどは
花になりたいのです
名前も知らない　野の花に
踏まれてもなお生きる　野の花に

鳥になりたいのです
生まれ変わったら　こんどは
鳥になりたいのです
鳥を巡る　渡り鳥に
自由に羽ばたく　海鳥に

風になりたいのです
生まれ変わったら　こんどは
風になりたいのです
綿毛を飛ばす　秋風に
潮の香（か）運ぶ　海風に

雲になりたいのです
生まれ変わったら　こんどは
雲になりたいのです
同じ形のない　あの雲に
風たなびく　あの雲に

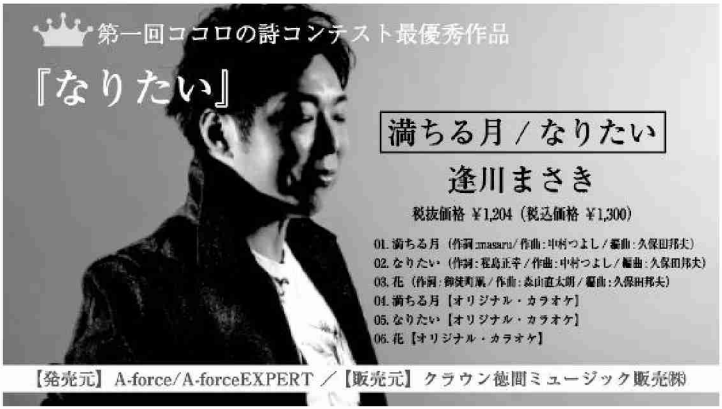
みんなと同じになりたいけれど
普通に生きたいだけなのだけど
生まれ変わったら　今度も
私は　私になりたいのです

失敗ばかりの人生だけど
無駄ばっかりの人生だけど
生まれ変わったら　こんども
あなたの子供で　在りたいのです

作：程島正幸さん

1975 年（昭和 50 年）7 月 17 日、大阪市西成区生まれ。家庭の事情で生後すぐに大津市に移り、２８歳まで過ごす。高卒後、約 10 年トラック運転手、その後派遣の仕事で近畿、広島、山口、福井で働きながら過ごすがリストラにあい、大阪に戻る。39 歳で双極性障害、冬季うつ病と診断される。就労移行支援事業所の適所を経て現在は就労継続支援 B 型事業所でパンの製造を行っている。

－「なりたい」は CD として一般販売をしております－



（３）そのほか

メーン会場ではメーンの画面の下部に富士通のライブトークにより、発言が逐一耳目に表示され、聴覚障害にも対応できるような仕組みを導入した。これは富士通の無償提供により人員と装置を配備していただいた。

ワークショップ１の「バリアブルレストラン」は公益財団法人日本ケアフィット共育機構の協力のもとに実施した。

また東京都文京区を中心に福祉事業所に声をかけて 7 か所から参加いただき物販の出店も行った。飲食物の販売及び飲食が禁止されていたため、製作物の販売及び書籍の販売となった。

１０－４　開催報告

最終報告

一般財団法人福祉教育支援協会

1

プログラム構成に向けて

本コンファレンスは「共生社会」「障がい者の学び」をキーワードにして東京大で行うことから、障害者・当事者がいないまま行政関係者や研究者だけの場ではなく、当事者が気軽に参加できること、共生できる場にすることを念頭にプログラムの検討を行った。

シンポジウムのテーマは、東京大学と文科省、福祉支援協会、さらにコーディネーターの津田英二・神戸大教授との間で議論した結果、当事者・障がい者からの「学び」の提起を行うことを全面に押し出し、これまでの「普通」である健常者中心の学びを問い直そうとの考えに至った。

結果として、ワークショップの３つは、「身体障がい」「精神障がい」「知的障がい」に焦点をあてて、参加を促すことも目的とし、その後の東大散策で、その参加者らの交流をイメージして構成した。

また分科会においても、精神疾患の治療の文脈で語られてきた当事者研究や、各地で個別で行われている重度障がい者の学びについても、統合的なコミュニティとすることを目指した。

2

概要

●テーマ：
～障害理解の促進、障害者の学びの場の担い手の育成、生涯にわたる学びの場の拡大に向けて～

●日時：2020年2月14日(金)　10：00～17：15
●場所：東京大学　本郷キャンパス
　　伊藤国際学術研究センター（伊藤謝恩ホール、多目的スペース）
　　教育学部（６部屋）
　　赤門総合研究棟（２部屋）
●実施団体：一般財団法人　福祉教育支援協会
●共催：東京大学大学院教育学研究科
●おもな内容：
　午前：全体会（歌の披露、シンポジウムなど）
　午後：ワークショップ３部門、分科会５部門、東大散策ツアー
　　物販（７事業所）

3

概要

●来場者数：目標２５０名・申込２５９名・**実績２３０名**（対目標：９２％）

●参加者　表中の（　）は運営スタッフ、介助者の内数

①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	合計
15 (3)	33 (8)	16 (4)	0 (　)	36 (1)	3 (　)	7 (　)	7 (　)	**282人 (52)**
⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	
0 (　)	51 (25)	5 (　)	11 (1)	23 (5)	2 (　)	24 (5)	49 (　)	

①学校（生徒除く）　②大学（学生除く）　③公民館等（施設建設含む）
④図書館・博物館・青少年施設等　⑤スポーツ施設・文化芸術施設等行政（社会教育・生涯学習・スポーツ・文化芸術）
⑥行政（学校教育、関係機関含む）　⑦行政（保健・福祉・労働、関係機関含む）
⑧行政（その他部局）　⑨社会福祉協議会　⑩障害福祉サービス等事業所
⑪社会教育関係団体（スポーツ・文化芸術団体等含む）　⑫当事者等団体（保護者の会等含む）⑬当事者（所属無し）
⑭保護者（所属無し）　⑮その他　⑯不明（記載なし）

経費（人件費含まず）

合計	旅費	謝金	会場費	その他
1,080,000円	190,000円	300,000円	390,000円	200,000円

4

事前広報と趣旨説明

引地がブロック内のすべての都県教育委員会を訪問趣旨説明を行う
・新潟県教育委員会（知事部局同席）
・山梨県教育委員会（知事部局も訪問）
・群馬県教育委員会
・千葉県教育委員会
・神奈川県教育委員会
・埼玉県教育委員会
・長野県教育委員会（知事部局同席）
・栃木県教育委員会（知事部局、外部識者同席）
・茨城県教育委員会
一特にシンポジウムのタイトルである「障がい者発の学びの提起」が
重要なコンセプトであり、健常者中心ではない視点を共有してほしいと呼びかけました。

メディア紹介
　東京新聞、そのほか各種ネットメディア「サイキュレ」「まぐまぐ」等

当日のメディア
・アルジャジーラ（中東のCNN）
・歌の手帖社、毎日新聞

5

当日の流れ

●10:00-10:30	オープニング　※主催者挨拶、文部科学省趣旨説明
●10:30-10:50	歌の披露　〈第一回「ココロの詩」最優秀作品「なりたい」〉
●11:00-12:15	シンポジウム　〈障害者発・新しい学びの提起－「健常者」中心の学びを超えて〉
●12:30-13:50	ワークショップ　※昼休憩と並行して3つの体験ワークショップを開催
●14:00-16:00	分科会　※5つのテーマ別分科会を開催／オプショナルツアー「東京大学散策」（14:00-15:00）も選択可
●16:15-17:15	クロージングセッション　※各ワークショップ・分科会の内容共有とまとめ

6

オープニング

司会：岡部真里（おかべ・まり）障害当事者
進行：引地達也（ひきち・たつや）シャローム大学校
→司会と進行の掛け合いの中、司会者が当事者であることをお伝えし、苦手なことをお話しながらスタート

あいさつ
東京大学大学院教育学研究科附属
バリアフリー教育開発研究センター
小国喜弘（こくに・よしひろ）センター長

趣旨説明
文部科学省総合教育政策局
男女共同参画共生社会学習・安全課障害者学習支援推進室
小林美保（こばやし・みほ）室長

7

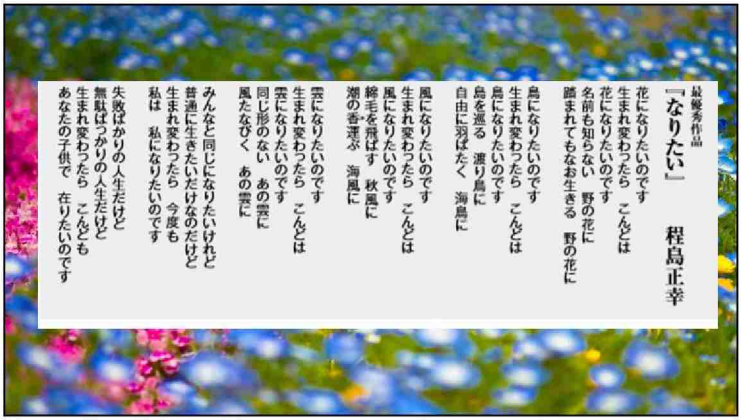
歌の披露

歌手：逢川（あいかわ）まさき
演奏：Psalm（サーム）

「ココロの詩」コンテスト2018年度最優秀作品
→生きづらさを抱えた方からの歌詞募集で、レコード会社と「歌の手帖」社、当財団の共催

なりたい→大阪の就労継続Ｂ型事業所に通う40代男性の作品
双極性障害や冬季うつなどに悩まされ、困窮の中にあり、母親ともうまくいかない日々でも「母親の子供になりたい」という作品

8



9

シンポジウム

障害者発・新しい学びの提起
―「健常者」中心の学びを超えて
コーディネーター：
津田英二（つだ・えいじ）・神戸大学教授

牧野篤（まきの・あつし）・東京大学教授
星加良司（ほしか・りょうじ）・東京大学准教授
引地達也（ひきち・たつや）・シャローム大学校学長

10

牧野篤（まきの・あつし）・東京大学教授
　社会教育の観点から、これまでの「常識」とされた学びの構成を根本から考え直す必要性を多方面の見識から提示

星加良司（ほしか・りょうじ）・東京大学准教授
　障害学の視点から、社会における「障害」の捉えなおしについての考えを展開

引地達也（ひきち・たつや）・シャローム大学校学長
　実践者としてシャローム大学校で行う障がい者向けの「学び」を紹介、学びは命の問題であり、包容力のある可能性を指摘

11

- シンポジウムの様子

12

ワークショップ

1　「バリアフル・レストラン」を考える
　　星加良司（東京大学）
2　ヒューマンライブラリーへようこそ
　　照山絢子（筑波大学）
3　音楽でつながる体感ワークショップ
　　河辺朋久（シャローム和光）、Psalm

東大散策ツアー　東大研究者とともに

13

ワークショップ

1　「バリアフル・レストラン」を考える
　　星加良司（東京大学）
→２１人参加、満員御礼

障がい者が日々感じているバリアフルな状態を疑似体験できるブースで「障害」を体験

14

ワークショップ

２　ヒューマンライブラリーへようこそ
　　照山絢子（筑波大学）
　→４８人参加、満員御礼

それぞれの語り手の人が「本」になって、その方の語りを聞くプログラム

15

・ワークショップ２（「ヒューマンライブラリーへようこそ」）の様子

16

ワークショップ

３　音楽でつながる体感ワークショップ
　　河辺朋久（シャローム和光）、Psalm
→６６人参加、満員御礼、立ち見も

音楽をみんなでつくりながら、初めての人とふれあう協働作業を楽しみました。

17

・ワークショップ３「音楽でつながる体感ワークショップ」の様子

18

東大散策ツアー　東大研究者とともに

参加17人

ストレッチャー式車いすの重度障がい者の方や精神、知的の障がい者の方がコミュニケーションをとりながら散策しました。

19

物販

文京区、板橋区の就労継続Ｂ型事業所など７事業所が出品販売。

・おもな販売物

アクセサリー、キーホルダー、ペンケース、書籍、など

20

分科会

各分科会とコーディネーター
1　社会教育が取り組む生涯学習支援　小林繁（明治大学）
2　「高等」教育におけるインクルージョン　津田英二（神戸大学）
3　カフェを介した「共生の学び」
　　兼松忠雄（全国喫茶コーナー交流会）
4　エンパワーメントに向けた学びのアウトリーチ
　　下川和洋（地域ケアさぽーと研究所）
5　当事者研究がもたらす学び　綾屋紗月（東京大学）

21

クロージングセッション

各分科会コーディネーター
1　社会教育が取り組む生涯学習支援
2　「高等」教育におけるインクルージョン
3　カフェを介した「共生の学び」
4　エンパワーメントに向けた学びのアウトリーチ
5　当事者研究がもたらす学び

全員が各分科会で討議されたものを総括し
「キーワード・キーフレーズ」を示し説明

進行　引地達也（シャローム大学校）

22

分科会

１　社会教育が取り組む生涯学習支援　小林繁（明治大学）

事例発表者
三浦修平（世田谷区教育委員会事務局生涯学習・地域学校連携課）
増本佐千子・石田智彦（国分寺市教育委員会　公民館課）

参加者４６人

クロージングセッションで出された
キーフレーズ
「学習としてのプロセス」

23

分科会

２　「高等」教育におけるインクルージョン　津田英二（神戸大学）

事例発表者
久保田健（KINGOカレッジ）
川口信雄（ゆたかカレッジ横浜キャンパス）
日戸由刈（相模女子大学）
相模女子大学学生

参加者３５人

クロージングセッションで出されたキーフレーズ
理想と現実

24

分科会

３　カフェを介した「共生の学び」
　　兼松忠雄（全国喫茶コーナー交流会）

司会　杉野聖子（江戸川学園おおたかの森専門学校）
事例発表者　川沼正憲（新潟県南魚沼市立総合支援学校教頭）
事例発表者　服部誠（ＮＰＯ法人MUSIC OF MIND理事長）
事例発表者　入山頌・比嘉健太（国立市公民館「喫茶わいがや」）

参加者２５人

クロージングセッションで出されたキーフレーズ
しかけとしてのカフェ

25

分科会

４　エンパワーメントに向けた
　　学びのアウトリーチ
　下川和洋（地域ケアさぽーと研究所）

実践報告者
名取潮子（日野市障害者訪問学級）
栗山弘子（NPO法人かすみ草いるか）、
佐藤友哉（訪問カレッジ@希林館学生）
鼎談登壇者　飯野順子（地域ケアさぽーと研究所理事長）
安部井聖子（東京都重症心身障害者（児）を守る会会長）
中石有美（東京都立東部療育センター医療ソーシャルワーカー）
参加者４０人
クロージングセッションで出されたキーフレーズ
学習の継続性

26

分科会

５　当事者研究がもたらす学び　綾屋紗月（東京大学）

事例発表者　るね/マァー/そらジロー（ダルク女性ハウス）

参加者４０人

クロージングセッションで出された
キーフレーズ

「マイノリティ同士で『共感』できた」

27

クロージングセッション

各分科会コーディネーター
１　社会教育が取り組む生涯学習支援　三浦修平（世田谷区）
２　「高等」教育におけるインクルージョン　津田英二（神戸大学）
３　カフェを介した「共生の学び」
　　兼松忠雄（全国喫茶コーナー交流会）
４　エンパワーメントに向けた学びのアウトリーチ
　　下川和洋（地域ケアさぽーと研究所）
５　当事者研究がもたらす学び　綾屋紗月（東京大学）

進行　引地達也（シャローム大学校）

28

成果の公表（予定）

・報告書冊子の作成

・ダイジェスト版の動画公開（公開場所については相談）
来年度の参加へのイメージを具体化する

・機関誌及びインターネット媒体への記事掲載
本協会発行の「ケアメディア」（約3万部発行）、
インターネットマガジン「まぐまぐ」「サイキュレ」等

・地域での勉強会を開催し報告・討議
来年度の委託研究の中で本年度オープンキャンパスを実施した
静岡県伊東市、長野県佐久市を中心に「コンファレンスで話さ
れたこと」を勉強会として報告し地域での議論と実践を促進する

29

アンケート結果（1）回収数　９８人

（2）あなたは、どのような立場で障害者の生涯学習活動に関わっていますか？（%）

①仕事として	②ボランティアとして	③当事者として	④これまで関わったことがない
68.4	8.2	10.2	7.1

（3）全体を通じて、今後障害者の生涯学習活動に取り組むにあたり、参考になる内容でしたか？（%）

①大変参考になった	②参考になった	③あまり参考にならなかった	④参考にならなかった
39.8	43.9	3.1	3.1

（4）今後、共生社会コンファレンスで取り上げて欲しいテーマ、課題をお聞かせください。
（自由記述）
・当事者自身が参加するコンファレンス（当事者を交えた意見交換）
・行政と民間の連携の実践報告
・学校教員が参加できる土日の開催希望

（5）障害者の生涯学習の推進、学びの場づくりなどについて、今後必要なことは何だと思いますか？
（自由記述）
・人材と資金の確保
・社会全体での課題認知・意識改革
・情報共有・対話の機会

30

アンケート結果

（6）その他（自由記述）

- 「福祉業界で働く人との共生社会」は、大学で教育分野で論じるものなのか不思議です。学びと共生を結びつけて、学校現場で何が起きているかを、論じることなく、イベント色の強いシンポジウムでした。健常者と共に学んできた、学びたいと思っている人間（障害者、関係者）の生きたシンポジウムを、次回は期待します。
- 学校で同じ年代で障害者と健常者が共に学び、生きる共生社会をテーマにお願いします。
- 「障害者」をまだまだ異質なものとして捉え上からものを言うようなところが多く感じられ支援すべき存在として見ている状況を感じます
- 学校教員が参加できるように土日の開催を希望します。学校教員抜きでこのような素晴らしい集まりを開催するのはもったいないと思います。
- ”共に学び…”がテーマとなっていますが、現状は障害者のみ障害者を中心とした学びに偏っているように見受けられました。ここを打破して、”共に学ぶ”を実現するためのアイデア創出のためのコンファレンスを積極的に打ち出していただきたいです。
- 行政職員の理解が必要。担当者といっても他の業務を担っている方が多いので、障害者の生涯学習支援活動をメインに行える人が必要だと思いました
- もう少し当事者参加型が必要かと思われます。
- 学びの場づくりなどについて、健常者と言われているまたは自分がそうだと思っている人達が「～をしてあげる」「～を受け入れる」という無意識のなかにある矛盾に気がつくことが必要。

31

総括

- 当初考えていた「宣言」のようなメッセージを出すことは出来なかった
- 予算内では収まらなかったことは経済行為の事業としては失敗
- 「共生」に向けては様々な立場からの意見が出され、総合的に調整する困難さを実感
- 当事者の「楽しかった」「面白かった」「東大に来てよかった」に救われている

32

１０－５　まとめ

共生社会コンファレンス開催において、委託団体として目指したかったのは多くの当事者に来てもらい、当事者とともに交じり合い考える場の設定であった。メーンテーマである「障害発・新しい学びの提起　健常者中心の学びを超えて」はシンポジウムを行う津田教授、

牧野教授、星加准教授、引地が積極的に合意する形で発出されたのは大きな成果だと考えている。シンポジウムでもそれぞれの立場から、テーマに沿った問題提起がされた。ワークショップではケアフィット協会と星加准教授が作った「バリアブルレストラン」、照山准教授の「ヒューマンライブラリー」の多彩な語り手の方々、プロのミュージシャンとともに音楽を作り上げる「音楽ワークショップ」で、当事者と混ざり合うという試みは形作られたと考えている。

分科会も「社会教育」「喫茶コーナー」「福祉型専攻科や『高等』教育とのインクルージョン」等、ほかのコンファレンスでもスタンダードになっている議論を抑えながら、「重度障害者へのアウトリーチ」「当事者研究」を加えられたのも、新たな視点を提供できたのではないかと思う。

最後のクロージングセッションでは、各分科会のコーディネーターが登壇し、分科会で議論された内容の総括を「キーワード」「キーフレーズ」で画用紙に記載し示しながら説明していただいた。第一分科会「社会教育が取り組む生涯学習支援」では「学習のプロセス」というフレーズで、社会教育が今後取り組む上で重要なのはプロセスであることを強調した。第二分科会の「『高等』教育におけるインクルージョン」では「理想と現実」が出され、福祉型専攻科など特別支援学校卒業後の学びや大学との連携などは理想は共有できるものの、実践では様々な現実があることを確認することになった。第三分科会の「カフェを介した『共生の学び』」では「しかけとしてのカフェ」とのフレーズで今後地域とともに共生社会の中で位置づけるための「しかけ」としての認識が必要との見解を示し、第四分科会「エンパワーメントに向けた学びのアウトリーチ」では「学びの継続性」で、重度障害者向けの学習機会を18歳以降も続けるべきとの考えがアピールされた。第五分科会の「当事者研究がもたらす学び」では「マイノリティ同士が共感できた」ことが、当事者の大きな励みになるとの見解で、学びの場で生きづらさを抱えた人が共感により立ち上がれる可能性を示した。

本コンファレンスでは多様なアプローチを試みたが、これを発展し各地域で共生社会の学びに取り組んでもらうためには、まだまだ啓もうと実践が必要であり、今回をきっかけにした様々なスピンオフの企画を期待したい。

１１．連携協議会

１１－１　第一回開催概要

＜開催日時＞2019年7月12日(金)15時30分～17時30分

＜場所＞シャローム大学校

＜出席者＞

・連携協議会委員

九里秀一郎・浦和大学総合福祉学部教授

小林節子・特定非営利活動法人見沼じゃぶじゃぶラボ代表

唐沢隆弘・東京リーガルマインド執行役員

田中瑛・東京大学大学院・学際情報学府学際情報学博士課程
佐光紀子・翻訳家
(欠席)高橋基成・元東京都特別支援学校教諭
・コーディネーター
引地達也・シャローム大学校学長・一般財団法人福祉教育支援協会専務理事
・主催者
最上千都・一般財団法人福祉教育支援協会理事・就労移行支援事業担当
加藤のぞみ・法定外シャローム大学事務局
大槻一敬・季刊ケアメディア副編集長・シャローム大学校准教授・広報担当

＜式次第＞進行・コーディネーター引地達也
1：本年度委員紹介
2：本年度計画説明
(1)本事業の考え方
(2)オープンキャンパス
(3)訪問講義
(4)視察予定
(5)カンファレンス開催
3：全体に関するコメント等
4：今後の日程確認・事務連絡等

１１－２　第一回開催内容

今年度は、3か年計画で進められる文部科学省「特別支援学校高等部卒業生等を中心に対象とした若者の学びを展開するための学習プログラムの開発事業」の2年目。昨年と同じメンバーにて、第一回連携協議会が開催された。

協議会では、まず今年度のオープンキャンパスについてその趣旨や開催プログラム、年間スケジュールが共有されました。続いて、今年4月に初年度を迎えたシャローム大学校の運営の取り組みについて質疑応答がなされた。

委員からは、オープンキャンパスと大学校運営において共通しているテーマとして、行政と密に連携をしていくことと共に、地域や民間一人ひとりとの取り組みや接点を大事にし、その内容を、地道にＳＮＳ等を活用して発信していくことが大切であるという意見があった。

１１－３　第二回開催概要

＜開催日時＞2019 年 11 月 6 日(水)15 時 00 分～16 時 30 分

＜場所＞シャローム大学校

＜出席者＞

・連携協議会委員

九里秀一郎・浦和大学総合福祉学部教授

小林節子・特定非営利活動法人見沼じゃぶじゃぶラボ代表

唐沢隆弘・東京リーガルマインド執行役員

田中瑛・東京大学大学院・学際情報学府学際情報学博士課程

佐光紀子・翻訳家

(欠席)高橋基成・元東京都特別支援学校教諭

唐沢隆弘・東京リーガルマインド執行役員

・コーディネーター

引地達也・シャローム大学校学長・一般財団法人福祉教育支援協会専務理事

・主催者

加藤のぞみ・法定外シャローム大学事務局

大槻一敬・季刊ケアメディア副編集長・シャローム大学校准教授・広報担当

(欠席)最上千都・一般財団法人福祉教育支援協会理事・就労移行支援事業担当

＜式次第＞進行・コーディネーター引地達也

1：事業進行報告

(1)オープンキャンパス

第一回　埼玉県和光市・ＤＮＡ抽出の実験

第二回　長野県佐久市・空飛ぶクラゲと音楽

第三回　静岡県伊東市・空飛ぶクラゲと音楽
第四回　埼玉県さいたま市・見沼田んぼで稲刈り
第五回　埼玉県和光市・オリンピックを知ろう＆清掃
(2)訪問講義報告
(3)カンファレンス開催
(4)来年度計画
2：全体に関するコメント等
3：今後の日程確認・事務連絡等

１１－４　第二回開催内容

まず今年度のオープンキャンパスについてその開催結果や所感について意見交換が行われた。続いて、来年２月に開催される文部科学省主催の「共生社会コンファレンス」について、その取り組みの進捗があった。委員間では、オープンキャンパスや実施イベントについて、行政とよりうまく連携をとっていくための方策が話された。

１１－５　第三回開催概要（最終報告会）

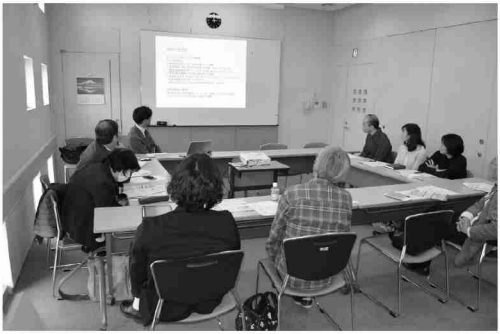
＜開催日時＞2020 年 2. 月 21 日(金)14 時 00 分～17 時 00 分
＜場所＞和光市中央公民館（埼玉県和光市中央 1-7-27）
＜出席者＞
・連携協議会委員
九里秀一郎・浦和大学総合福祉学部教授
小林節子・特定非営利活動法人見沼じゃぶじゃぶラボ代表
高橋基成・元東京都特別支援学校教諭
（欠席）

佐光紀子・翻訳家
唐沢隆弘・東京リーガルマインド執行役員
田中瑛・東京大学大学院・学際情報学府学際情報学博士課程
・コーディネーター
引地達也・シャローム大学校学長・一般財団法人福祉教育支援協会専務理事
・主催者
最上千都・一般財団法人福祉教育支援協会理事・就労移行支援事業担当
加藤のぞみ・シャローム大学校事務局
大槻一敬・季刊ケアメディア副編集長・シャローム大学校准教授・広報担当

＜式次第＞進行・コーディネーター引地達也
1：事業進行報告
(1)オープンキャンパス
(2)訪問講義報告
(3)コンファレンス報告
(4)総括
2：全体に関するコメント等
3：来年度計画

１１－６　第三回開催内容

今年度の最後として、最終報告会も兼ねた第三回連携協議会が開催された。会では、全７回のオープンキャンパスの振り返りや参加者アンケート結果の共有、訪問講義の報告が行われ、次年度の構想も共有された。



１１－７　まとめ

連携協議会においては事業遂行の経過報告とともに、開発プログラムや内容については、各委員の専門的見地から以下３点について集中的に協議された。

１　カリキュラムの妥当性　市民活動や高等教育との連携について

２　プログラムのやりやすさ　講師・ファシリテーター側の育成を踏まえて

３　全体としての持続性と地域での展開　障害者の生涯学習の普及を可能とするために

１　カリキュラムの妥当性　市民活動や高等教育との連携について

浦和大学教授並びに福祉支援や農業支援などの市民活動も行う九里委員から高等教育機関との連携において、今回のカリキュラムづくりを基礎にレクレーションでの交流が大学生と福祉関係者、当事者との交わりは有効であるとの考えを踏まえ、浦和大学や埼玉地域とのつながりにより、カリキュラムの発展を目指すべきとの考えであった。埼玉地域でNPOを運営する小林委員からも稲刈りなど必要な作業に学びを組み入れることの大切さを指摘し、これにより市民との交流も活発になるとの意見であった。

２　プログラムのやりやすさ　講師・ファシリテーター側の育成を踏まえて

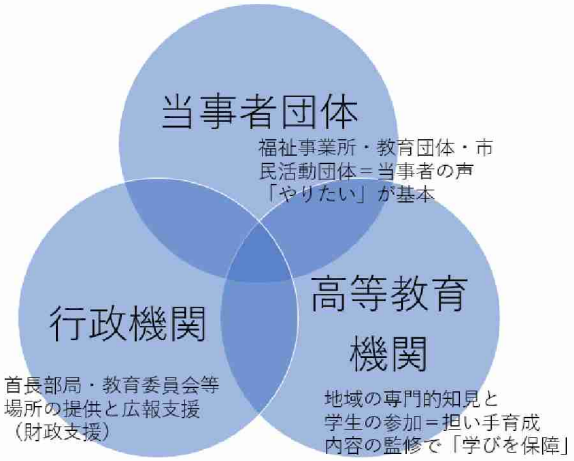
講師やファシリテーターを務めた各委員からは障害特性を踏まえてのプログラムは当日の参加者の状態や体調などでも左右されるために、汎用的なモデルで対応するプログラムが望ましいとし、初年度から行っているオリエンテーションを確実に実行することで場づくりが設定される重要さを確認した。場づくりの 4 原則の説明はフォーマット化する方向で考え、この場づくりの指導とともに講師・ファシリテーターを育成する必要があるとの認識であった。まずはサブティーチャーとして、少人数の対応をした後に

３　全体としての持続性と地域での展開　障害者の生涯学習の普及を可能とするために

今回の伊東市、佐久市での地域開催により、長野県松本市の市民グループや山梨県甲府市の福祉事業型の「学びの場」をつくっている団体からの自地域での開催を要望する声が上がった。今後は地域において「学びの展開を必要と考える団体グループ」が中心になることが、今後の普及と地域の持続性につながるとの考えでまとまった。

■検討結果

・連携の効果的な実施体制



・実施体制のモデル

シャローム大学校の役割―カリキュラム作成の支援及び提供、プロセスの支援

実施主体―当事者に近い支援団体グループが中心となりつつ、各地の高等教育機関が必要なリソースを提供、行政が支援

・効果が期待される想定の実施体制

さいたま地域、長野県、山梨県における来年度想定される実施体制は以下である

	当事者団体	高等教育機関	行政機関
埼玉地域	シャローム大学校、クリの家、のらんどあぐり、チャレンジド板橋駅前他福祉施設	浦和大学 ・九里秀一郎教授、片山昭義教授ほか	埼玉県、埼玉県教育委員会生涯学習課 さいたま市緑区教育委員会、和光市社会援護課
長野地域	ユニバやまなし 青年期の学びを考える会	伊藤学園	山梨県 山梨県教育委員会
山梨地域	プロジェクトぎふと実行委員会	地域の専門学校	長野県 長野県教育委員会

■今後の検討と課題

来年度以降も見据えて課題となるのは各領域での担い手の育成であり、具体的には以下３

点である。
・高等教育機関での展開をスムーズにするために各教育機関内に実施者が必要である
・行政支援を恒常的に行うために、行政内に障害者の生涯学習の専門家が必要である
・生涯学習の担当者に障害者視点でカリキュラム作りをする見識が必要である
総じて、障害者の生涯学習を実行する専門家の育成が各現場に求められ、教育の要請とともにプログラムの必要性も出てくることが考えられる。

１２．総括

１２－１　成果と効果

事業計画書で記載した「見込まれる成果・効果」をもとに、「→」後に現状での結果を総括する。

【学習プログラム講義】

＜招集型学習＞

初年度で得られた知見をもとに、「1 日バージョン」「短時間バージョン」でそれぞれの授業項目と内容　内容設定と伝え方、言語の選択や作図の適性化などの授業の進め方について検証し、さらなる最適化を開発

→講義の長さは「1 日」の場合はレクレーション要素を多くしないと、「学び」に慣れていない当事者は集中力を切らしたり、過度に疲れてしまう可能性があるため、1 日のプログラムは休憩とレクレーション要素を盛り込みながら学びを充実させる必要があるなろう。短時間の場合でも、昨年の知見から得た授業は 50 分を基本に、講話は 15 分以内におさえてのアクティブラーニングを心掛けることで効果が大きくなることを確認した。

やはり、サブティーチャーの役割は重要であり、4－5 に 1 人という割合で、障害特性に応じた対応は必須である。ワークを通じて当事者同士のちょっとしたトラブルもあったことから、アクティブラーニングを通じてどのような「介入」「指導」の方法が有効かは一概には言えないものの、「サブティーチャーの考え方・あり方」のようなガイドラインは用意する必要があるだろう。

＜訪問型学習＞

1 タームで毎週 1 回 50 分の講義を連続的に行うことを考えての学習内容についての検討を経て、学習内容の決め方、受講者ニーズの汲み取り方、学習内容への反映の仕方などを検証し成果として示す

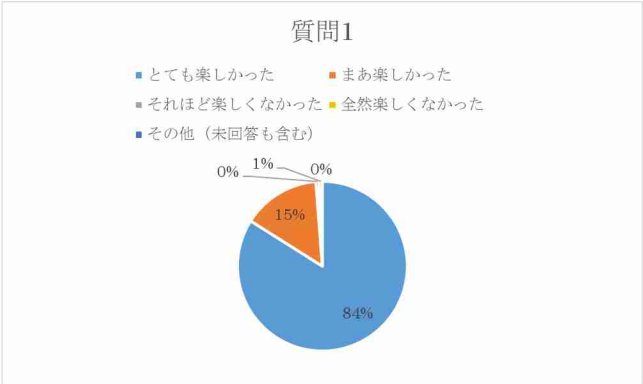
→当事者のニーズや学習支援者のこれまでのやり方などで、授業の時間配分等が固定化されてしまい、統一化されたフォーマットにするのは、寧ろ障害特性に対応するという点においては、必要がないことかもしれない。当事者が「何を」「どのように」「どれだけ」やりたいのかを中心に体調を踏まえた上で行う学習であるから、まずは「当事者発」が絶対的な出発点とするべきであろう。従って、ケーススタディを増やしていきながらバリエーションを

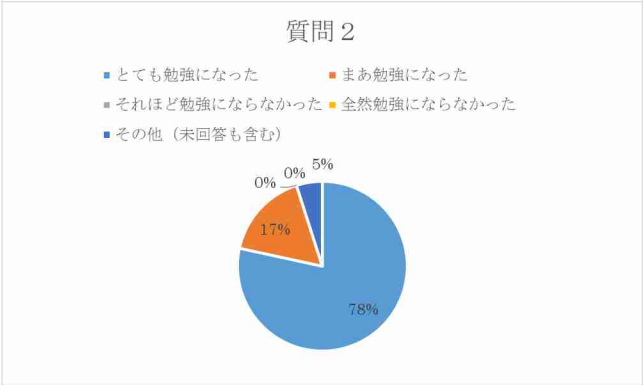
積み重ねた上で、１つの「雛形」を作るが、強制力のない参考資料として提示していくことが望ましいだろう。

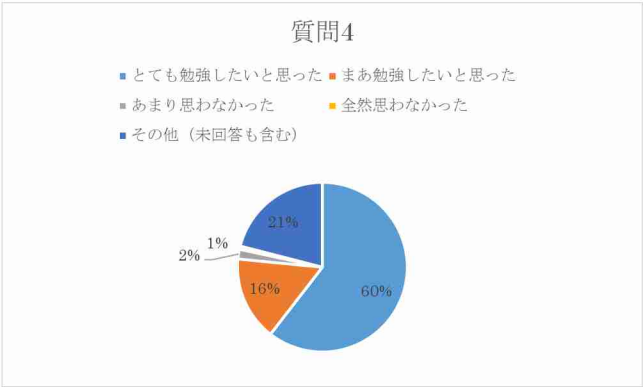
【受け手側の反応】

招集型・訪問型のどちらにおいても受講者の学習意欲　レポートやアンケートをもとに「何が学びに必要か」を検証し成果物に反映させる。以下２点の観点で検討し成果を示す

→まずはアンケートで示された選択回答の質問の全体統計は以下であった。おおむね参加により学びを楽しんだようではあるが、「勉強したいか」の問いかけには積極的に「勉強買いしたい」との数字は半数以上ではあるが、「楽しかった」テンションとは違った反応が出るのは、いまだに「勉強」に対するイメージがネガティブな面があることを反映しているものと思われる。







人格形成への有効化

連携協議会での検討やサブティーチャーの感想、支援者の声などから受講者の心の変化などをくみ取りながら、何が授業で有効であったかを提示

→知らない他者との交わり合いは、生活が固定化された障害者にとっては未知との遭遇程の衝撃があるかもしれない。音楽プログラムで知らない人とハイタッチするのは、最初は戸惑いつつも、だんだん楽しくなっていくのは、他者とのつながりにおける「自分」という人格への自覚にもつながっていると思われる。

社会性を身に着けるための有効化

授業をすることによって、協調性や協働性の変化があったのかを検証し、そのポイントを検出する

→やはりグループ形式のアクティブ・ラーニング方式がサブティーチャーを加えつつ、ゴールに向けて他者と協調しながら問題を解いていくことは、社会性を身に着ける経験にもなるであろう。ただ、これも人からの導きが必要のため、ファシリテーターがそのきっかけを示す質問や出題をしたとしても、リーディングするサポート役は必ず必要となってくる。

【コンテンツの可能性】

訪問型・招集型ともに、どのような学習コンテンツが有効かを検証しながら、そのラインアップを増やしていくことで多様な学習内容を示したい。今年度は具体的な以下のカテゴリーでシラバス作成も視野に置きたい。

→招集型は、本事業の参加者が「知的障がい者が多い場合」「精神障がい者が多い場合」の2パターンがあり、障害特性によってコンテンツは変化を余儀なくされることをスタンダードとしたうえで、その変化する、もしくは変化できるコンテンツがこの招集型学習の特徴的なコンテンツだといえる。

訪問型は、こちらも重度障害者のコミュニケーションの取り方によって学習方法は変わってくるが、学習内容については、教員の数だけ存在していることから、それらの教材を整理し、フォーマットとして蓄積していくことで、今後の広範な展開が期待できると思われる。

初年度に撮影し検証した「映像化コンテンツ化」は、本年度も撮影の仕方の研究をしたうえで3年目でポイントを撮影してもらい、提示の仕方の工夫でDVDでの学びも可能にしていきたい。

１２－２　まとめ

本事業のうちオープンキャンパスについては、事後のアンケート提出数でみた場合には、１６２人であった。しかしながら、参加者が昨年よりも重度の知的障害者の割合が昨年よりも高くなったことや、午前・午後のプログラムのうち半日だけの参加の方も多かったことによりアンケート記入が困難な方や記入の時間のないまま退出された参加者を考えると、昨年参加者の延べ２１１人よりも増加しているものと考えられる。昨年は障害種別で７割以上が精神障害であったが、今回は地域の就労継続支援事業所や生活介護等の施設に入所もしくは通所する知的障害者の方も多く、知的障害者の割合が増えたことにつながった。

本年度の事業は同じ場所で同じコンテンツにより障がい者の学びを確実に実行することの重要性を考えつつも、障がい者の学びを地域社会に広め地域の自治体や各種コミュニティ、そして福祉領域の団体や個人、そして当事者とその関係者が一体化して取組むものとして提示し、各地域で持続可能な形を作るための仕掛けに注力した。

その結果として、各地域に足を運び丁寧に説明したことは、開催のプロセスとして必要に迫られたこととはいえ、自治体だけではなく周辺の福祉・教育関係に「障がい者の学び」を提起できた点として極めて重要な知見を得たと考えている。その知見とは、今後の展開に向けて重要なポイントとなる個所であることは間違いない。得られた知見とは以下である。

１　障がい者の学びという概念は地域には存在していないことから、「何が学びか」を確実に伝える必要がある
２　地域での障がい者施設は都市型の施設に比べ、ある程度の空間としてのスペースを備えていることから、そこから「外に出る」感覚が乏しく、市民との交わりへのハードルが高い
３　「学び」から次につながる方向性へのイメージが示されていないために、継続した展開により、学びの効果を示すことが重要である

上記を単純なフローで示せば、「学び」の伝達→外へのマインドの醸成→学びの提示と継続、の流れを確保する必要がありそうだ。

訪問講義については、実施すればするほど、ほかの地域からの実施への要望の声を聴くことになり、社会におけるニーズの高さを感じることになったが、実際に「学習支援」「講義」をする担い手が不足しているのが現状である。医療的ケアの必要な方々への対応にはイメージとして介護や看護領域になることで、関わりあうことへのイメージがないのが現状であろう。実際に今回の学習支援者はすべて特別支援学校教員の経験がある方であり、各地にあるニーズという点を、まずは教える側の点を結び、教員だけではなく一般市民の中でのかかわりを増やしていくかが重要になる。面の展開になった時に本事業で実際に使った学習プログラムやカリキュラムを提示することで、教える側の支援ができるように準備を進める必要があるだろう。

共生社会コンファレンスは、10－5 で記しているので省略するが、この取組をどのように広げ、地域の活動に結び付けるかが来年度以降問われることになるため、このコンファレンスの波及モデルを地域でも実行するなど持続可能なモデルを構築するための活動は続いていくことになるだろう。

１２－３　次年度に向けて

初年度、２年目の事業を経て以下の点が明らかになり、最終年となる３年目ではゴールに向けて力点が明確になったと考えている。２年を通じた事業で各地域での認知も確実に増えて、地域における「障がい者の学び」を展開したい市民グループから実施を要請する声も出されている。地域では各地の地域モデルを確立し持続可能な形を作っていく関係があり、来年度はそのような声のある場所で、地域が中心になってオープンキャンパスを行っていきたい。

・行うべき事業が明確である。
・地域での「障がい者の生涯学習」モデルの構築
・フォーマット化して提示できる資料や事例の体系的構築
・重度障がい者に対する研究開発とそのネットワーク化
・共生社会コンファレンスでの議論の成果の普及

また事業計画で示されているシャローム大学校での恒久的な障害者の生涯学習の運用に

向けては、現在以下の３点を実施している。

・通学型学習　通常の通学と講義や自習をキャンパスで行うスタイル

・訪問型学習　医療ケアの必要な方の居室等に講師がうかがい講義をするスタイル

・連携型学習　遠隔の教室を複数結び、テレビ会議システムを使っての講義スタイル

形式は様々であるが、教科の項目は大枠で同様とし、さまざまな形であれ体系づけたものを学ぶスタンスとしながらも、障害特性や個人のニーズに合わせて柔軟に対応している。現在想定している以下の学習単位に準じたプログラムの位置づけをすることで、すべての型の人が「同じカリキュラムでコミュニティ化」してつながっていくことを目指しており、本事業で得られた知見を日々、カリキュラムの内容に反映させることで、新しい「学び」の精度を共に向上させていきたい。

基礎課程履修科目（2年）

科目区分	授業科目	1年 単位	2年 単位	開設 単位	必須 単位
基礎科目	言語と生活Ⅰ	4		4	8
基礎科目	言語と生活Ⅱ		4	4	
基礎科目	芸術と生活Ⅰ	4		4	8
基礎科目	芸術と生活Ⅱ		4	4	
基礎科目	科学技術と生活Ⅰ	4		4	8
基礎科目	科学技術と生活Ⅱ		4	4	
基礎科目	人間と生活Ⅰ	4		4	8
基礎科目	人間と生活Ⅱ		4	4	
基礎科目	健康と生活	2	2	4	4
基礎科目	情報と生活	2		2	2
演習	基礎演習Ⅰ	4		4	8
演習	基礎演習Ⅱ（課程修了論文）		4	4	
実習１	オリエンテーションⅠ オリエンテーションⅡ	2	 2	2 2	4
実習２	ボランティア活動Ⅰ ボランティア活動Ⅱ	2	 2	2 2	4

さらに３年度間をイメージした展開は以下の通りとの記載を計画段階でしているが、基本的に当初から変わらないものの、２年目で地域モデルとしてのカリキュラムの「実証」と地域開催のプロセスの発見により、３年目の開催に向けた取組みに関する行動の質は上がったものと考えている。２年目は訪問学習の知見も加わり、さらには「共に学び、共に生きる共生社会コンファレンスイン関東甲信越」の実施団体として委託を受けたことから、共生社会に向けた新しい学びについての提起をする立場となり、ここで得られた知見も各地域に

普及・展開する責任も発生したと考えている。

これらにより、3 年目は以下の 3 年間のフローの集大成として以下 3 点を中心に展開していき、さらなる実証研究と研究成果を示していきたい。

【オープンキャンパス】

・地域での共生社会に向けたオープンキャンパスの開催（要望が出ている地域 2-3 か所）

・埼玉県での共生社会に向けたオープンキャンパスの開催（自治体と高等教育機関が連携して開催）

・和光市の市民とともに共生社会に向けたオープンキャンパスの開催（2020 年東京五輪に関連のおもてなしを兼ねて）

【訪問講義】

・研究対象者の継続学習とカリキュラム開発

・全国の関係者や学習支援者を集めたコンファレンス開催とネットワーク化

【共生社会コンファレンスの普及】

・オープンキャンパス実施の佐久市と伊東市で共生社会コンファレンスの報告会

これら事業の展開により、オープンキャンパスと訪問講義、コンファレンスの知見が融合し、新たな地域モデルが確立され、それが広がっていく連鎖がつながるよう取り組んでいきたい。

【マニュアル作成】

・講師とサブティーチャーのガイドラインを作成

	期間の位置づけ	主な内容	成果イメージ
1 年目	研究開発	オープンキャンパス開催（本事業）	講義内容等のフォーマット化等（本事業）
2 年目	実証	オープンキャンパス開催 ・和光市モデルの確立 ・他地域での開催 訪問型講義の実施 連携型講義の実施（本事業外） 法定外「大学」で検証（本事業外）	1 年目の成果を効果測定し、和光市での継続実施と確立、他地域での展開、訪問講義の可能性の追求により、各コンテンツの充実と形を提供する。さらに展開可能な型をフォーマット化、映像での遠隔地参加やDVDによる時差参加の可能性を提供
3 年目	展開	オープンキャンパス開催（埼玉県、他地域） カリキュラムは大学校で検証 コンファレンスの普及	全国で障害者の学びが集合型や訪問型等、方法に応じてコミュニティ化して、そのコンテンツやフォーマットを提供できる。各地での実践が広がり、大きなコミュニ

		訪問型の普及と連帯 DVDによる他地域開催 訪問型や連携型などのさまざまな形で、どんな障害の方でも学習できる環境とするための取組み	ティと小さなコミュニティが有機的に交わる「障害者の生涯学習」が展開する

来年度終了後は継続して「障がい者の学び」の実践を通じて持続可能な取組として継続する予定であるが、以下の点を重点的に取り組んでいきアウトカム目標を設定したい。

まずは本事業の実施から考える展開である。

本事業	アウトカム目標
オープンキャンパス事業	地域と高等教育機関とが連携し各地での開催 →全国各地の公民館等で定期的に実施 ガイドライン作成、カリキュラム提供、ファシリテーター育成
訪問講義事業	全国の動きをネットワーク化 →全国どこでも受けられるサービスに ガイドライン作成、カリキュラム提供、支援者育成
共生社会コンファレンス	継続開催・各地域での小規模な研究会開催 →担い手の育成・実践・研究

最後に7年目を見据えた中長期的な目標を示したい。

	1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	7年目
オープンキャンパス事業	和光市及びさいたま市で開催/地域市民団体・NPO・福祉団体と連携＝A	A及び伊東市、佐久市し地域モデル構築＝B	埼玉県内で浦和大学・県教育委員会で開催、Bモデルで甲府市、松本市で開催	高等教育+自治体モデル＝Cで継続開催（長野、山梨、埼玉基点に5か所程度）	「障害者とともに学ぶ」ABCモデル発信し10か所で開催（後方支援含む）	「障害者とともに学ぶ」ABCモデル全国で開催、研究会発足、全国大会も
訪問講義事業	調査研究	実践研究4人カリキュラム開発検討	実践研究及びネットワーク化向け全国会合	ネットワーク化の運用・地域での活動活発化コンテンツ提供	ネットワーク化拡充で全国広くで学習可能とする基礎づくり	全国で訪問学習が可能に
共生社会コンファレンス		コンファレンス実施（関東甲信越）	コンファレンス実施+佐久市と伊東市で報告会・研究会	コンファレンスと各地で研究会（エリア5か所）	コンファレンスと各地で定期研究会（エリア7か所）	コンファレンスと各地の研究会が融合し議論の質向上
ガイドライン作成	調査研究	ガイドラインの基礎検討	ガイドライン作成（初版）	ガイドライン普及（研究会）	ガイドライン普及と実践	ガイドライン改定（研究会）

以上

参考資料

本事業に関するインターネット上で掲載されたコラムは以下である。「メールマガジン　まぐまぐ」「ニュース屋台村」「精神系ポータルサイト　サイキュレ」が主な掲載サイトであるが、ほかの掲載サイトに転載しているケースも見られた。

メルマガ　ジャーナリスティックなやさしい未来――2019 年 6 月 26 日　第 292 号

訪問講義の可能性を動いて、考え、そして動いて

昨年度に引き続き子年度も文部科学省の障害者の生涯学習に関する委託研究事業の採択を受け、本格的に始まった。文科省の正式名称は「学校卒業後における障害者の学びの支援に関する実践研究事業」。その中でわたしたちが行うのが「特別支援学校高等部卒業生及び学びを必要とする障害者を中心に対象とした若者の学びを展開するための学習プログラムの開発事業」である。昨年度は障がい者に学びの楽しさを知っていただくための「オープンキャンパス」の開催を中心に実施し、今年度はオープンキャンパスを本拠地の埼玉県和光市のほか、静岡県伊東市、長野県佐久市でも行うほか、医療ケアの必要な方向けの「訪問講義」にも取り組むことも始めた。加えて、この障がい者の学びに関する見識を広め、障がい者の学びへの理解と担い手の育成に向けた啓もうを目的にしたコンファレンスも行う予定である。今回は新たに始めた訪問講義について知っていただきたい。

シャローム大学校開校とともに訪問講義の学生 2 名が入学し、毎週の講義を私が訪問し担当しているが、1 人は体調不良により休止し、1 人は自宅での受講を欠かさず重ねている。筋ジストロフィーのため体はほとんど動かせず、オーラルコミュニケーションも出来ないが、目の表情は豊かで、うなずきは目の瞬きで伝えている。肩の僅かな動きをエアーのパッドでコンピューターに伝え、カーソルを動かし文字を選択して意思を表明する方法で、私に習ったことを繰り返し、次回やりたいことも明確に示してくれる。アクリルの文字盤を通して、伝えたい文字に視線を合わせる方法もあるが、私の習熟度が遅く、まだまだ潤滑なコミュニケーションができないから、どうしてもパソコンにたよってしまう。本来の社会モデルとは、私がアクリルの文字盤を使うことだと分かっているから、心苦しい。

この講義では、「国際社会」を学んでいる。これまで世界地図や世界の国旗を画像で示しつつ、世界の国々を眺め、学びたい国のリクエストを受けて次週の国を決めている。初回のオリエンテーション、次に世界の国々を受けてのリクエストは「中国」。その次は「韓国」、その後は「モンゴル」「フィリピン」「タイ」「インド」「サウジアラビア」「トルコ」と重ねてきた。東アジアの近隣国から、東南アジア、南アジアから中東にわたり、ヨーロッパとユーラシア大陸の懸け橋に至る、というリクエストは国と国のつながりを意識した結果では

ないかと喜び、さて次は欧州に行くのかと思いきや、次のリクエストは「日本」だった。私の勝手な思い込みではあるが、やはり日本に「戻る」のは意外。しかし、それはなぜか考え続けた。

中国からトルコまで来る工程で、常にその国の「歴史的な成り立ち」「周辺国との関係」を考え、情報を提示してきたが、これまで習ってきた日本が他国との連関の位置づけがまだ習熟するには、年齢が若かったのかもしれないと思いながら、それは「日本」ではなく「世界の中の日本」での学び直しの要望であると解釈をした。「ここまで来たからヨーロッパでいいんだよ」と促し、その伏線として、トルコの講義ではトルコ行進曲を紹介し、いわゆる「トルコ行進曲」で有名な欧州の大作曲家、モーツアルト、ベートーベン、ハイドンも紹介し、欧州への道筋を描いてみた。しかし「日本」というかたい意思。それに少々気圧されながら、私の想像をはるかに超えた成長に喜んでいない自分に気づく。それは自分の講義ではない、当事者の、学生の、講義なんだ。そんな当たり前のことを再確認する自分を恥じらいながら、彼の目をしっかりと見つめ講義をしていこうと思う。

メルマガ　ジャーナリスティックなやさしい未来----2019年7月10日　第294号

地域で障がい者の学びを作ることと学都への期待

障がい者の学びの場を創出するために昨年度は主に本拠である埼玉県和光市で行ってきた「オープンキャンパス」は、他地域での学びのコミュニティ形成に向け、長野県佐久市と静岡県伊東市での開催に向けた準備がスタートした。先日、佐久市で市役所や教育委員会、福祉事業所を訪問するために同市に宿泊し、地方に宿泊する時の習慣でホテルのロビーで地方紙に目を通そうと信濃毎日新聞をめくっていると地域版に興味深い記事が出ていた。長野県松本市で障がい者の母親が中心になって「学びの場」を定期的に実施しているという内容だ。今年佐久市で開催するのも長野県では、このような動きがない、との認識からであったが、松本で芽生えているのならば、是非つながりたい、という思いで、急ぎ電話で担当者に連絡し、その日の夕方に松本に出向くことになった。

このグループは「ぷろじぇくとギフト実行委員会」で、福祉型カレッジの設立を目指すグループである。保護者が中心となって学びを作る事例は、私が遠隔授業の提携先でもある新潟市のKINGOカレッジがそうであるように、全国で静かに広がっている。知的障がい者の支援活動は、当事者自身の動きが出にくい中で、最も近い家族や保護者から始めるケースが多い。それを社会では「子息への思いを形にした」と受け入れがちで、新聞やテレビなどのメディア報道でも「両親の純粋な愛」のトーンが見え隠れするが、大事なのは当事者の生きる

コミュニティを社会が作っていくことに向けた具体的な動きができるかどうか、であり、親の思いは１つのきっかけである。何を作っていくか、そのために親も市民も関係なく何ができるかを考えるべきであり、それがノーマライゼーション社会と呼べるものなのだと思う。

同実行委員会に限らず、親の思いで動き始めた人たちは、市民を巻き込み、行政を動かす中で、自然とその活動は公共性を帯びてきて、多くの賛同者を得ることに気づくことになるが、それは決して１人の子供のためではなく、１人からたくさんの幸せや課題解決につながるイメージに結束していくのを見てきた。そして、今も幸せなことで、それを見せられている。私自身、障がい者に関する活動をしていると、よく問われることが「家族か子息に障がいを持った方がいるのですか？」である。多くの人が私の活動のモチベーションが理解できないような顔をする。そして私自身も、「いない」との返答により先方の戸惑いを見てしまうからである。だから、家族の思いから行動が始まるというステレオタイプのイメージから抜け出し、誰でもソーシャルワークができる多様な社会にしていきたい。

さてこの松本市だが、この代表はエネルギーあふれる母親だった。プロジェクトも保護者の思いから市民や行政にネットワークが広がりつつある。その形の１つとして８月４日に音楽フェス「ギフトライブ　羽ばたけ！未来へはばたけ」を行う予定だ。書家の金澤翔子さんのパフォーマンスや音楽、屋台、展示販売などで地域へのつながりの拡充を目指す。障がい者の学びを作るためのコミュニティづくりが、松本市でどんな展開をみせるのだろう。「学び」をキーワードにした場合、基本構想に「学都松本」を掲げている町がどんな反応を見せるか楽しみだ。誰もが学べるモデルになる予感がするのは、勝手な期待と希望である。

メルマガ　ジャーナリスティックなやさしい未来----2019年9月4日　第302号

2年目の「オープンキャンパス」と地域モデル確立に向けて

先日、障がい者と市民が共に学び合うシャローム大学校の「オープンキャンパス」が今年度の初めての講座を埼玉県和光市で行った。昨年に引き続き５つのテーブルに5−6人の当事者にサブティーチャーをつけたスタイルで行う体験型の学びは、これまでの経験を生かした工夫の上、新しい者同士の「交じり合い」と「学び合い」が狙いにある。今回の授業のテーマは「いきものってなんだろう？―いのちから私たちを考える」で、講師は杏林大医学部の先生だった佐藤玄・シャローム大学校教授。DNA研究が専門の佐藤教授が主導し、いきものの設計図であるDNAをクイズ形式で考え、実際に野菜や豚のレバーからDNAを取り出して、見る、という実験を行った。和気あいあいした雰囲気の中、初めて見るDNAに歓声を上げたのは、障がい者も一般参加者もサブティーチャーも関係ない。これが学びのよさなの

だとつくづく実感する。

この講義は文部科学省の「障害者の生涯学習」の確立に向けた委託研究事業の一環として昨年度に引き続き実施する事業。2014 年に日本が批准した障害者権利条約に基づく「障害者の生涯における学び」をどのように保障するかの課題に正面から取り組んだ試みだ。文科省が本格的に取り組み始めたのが 3 年前で外部へ研究委託したのが昨年から。その昨年から私は文科省とともに、「障害者の学びの拡大」に向け奮闘しているが、やはり「障害者の生涯学習」への認知度が低い、というこの全体環境へのアプローチが困難だ。特に今年度は昨年実施した地元の埼玉県和光市やさいたま市を飛び出し、地域モデルを確立しようと長野県佐久市と静岡県伊東市での開催に向け準備を進めているが、周知の段階から難しさを痛感している。

この地域モデルの先駆けとなる佐久市と伊東市での講義テーマは、午前が「物理学の実験からコミュニケーションを考える」(九里秀一郎・浦和大教授)、午後が「コーラスと歌ってう触れ合うコミュニケーション」(ピアノコーラスグループ、サーム) の予定だ。今年度初回の講義と同様で、集まった人同士が触れ合い、学び合うスタイルなので、基本的に楽しむためにきてほしいと考えている。「うちの子は落ち着きないから」という心配する親御さんもいらっしゃったが、椅子に座っていなくても、スペースは広いから、自由に過ごしてもらって構わないし、座らないことを咎めるつもりもない。それが特別支援教育を内包したこの学びの場だし、どんな人でもその空間で一緒にいることで、何か「つながる」可能性はあるはずと信じることが、この学びの場の基本姿勢である。

この新しい学びの場の可能性や私たちの思いや方針を伝えるのは、難しい。新しい枠組みの新しい概念だから、一人ひとり、一か所一か所、丁寧に説明し仲間を増やすしかない。シャローム大学校の「オープンキャンパス」がむしろ、大学校の宣伝ではないかと誤解されている場合もある。地域でやりたいのは「モデル作り」だけで、その地域で地域の方々が学びの場をそれぞれ作っていただくのが目標だから、シャローム大学校の名前は気にしないでほしいし、なくてもよいとも思っている。今年の地域モデル確立に向けて、集まる方々への呼びかけはなかなか難しいが、今年に限らず、来年も地域の方々とともに動くことも目標にして、取り組んでいきたい。佐久市は 9 月 25 日 10 時から 14 時半まで、佐久市の佐久市民創練習センターで、伊東市では 10 月 9 日に伊東市観光会館別館で行われる。障がいの有無にかかわらず、すべての人に来てほしい。

メルマガ　ジャーナリスティックなやさしい未来----2019 年 9 月 11 日　第 303 号

今こそ「インクルーシブ教育」の議論を進めるべき

「インクルーシブ教育」との言葉は一般にまだまだ馴染みが薄い。障がい者の教育に関わる人には、目指すべき姿として「当たり前」だが、それ以外の世界では全く認識されていない概念でもある。この乖離が日本でインクルーシブが進んでいない現状であり、「インクルーシブ教育」の現在地だ。政治やメディアの責任も指摘しつつ、このあたりで大きな国民的な議論には出来ないだろうか、と考えている。特に現在、現場で進行しているのは 2014 年に日本が批准した障害者権利条約に基づく、「インクルーシブ教育」の実現に向けた動きで、すべてを包摂する教育に向けても、「通常学級に障がい者を入れる」という考え方が先行してしまっている感がある。新しい「インクルーシブ」の概念を統一しなければ、本来のあるべき姿としてのインクルーシブの実現は程遠い。だから議論が必要なのだと思う。

このインクルーシブ教育の基本となるインクルージョンが世界的に認知されたのは、1994 年。ユネスコがスペイン・サマランカで開催された「特別なニーズ教育に関する世界会議」で採択された「サマランカ宣言」であった。宣言は「インクルーシブな方向性を持つ学校は、万人のための教育を達成する最も効果的な手段」と明確にすべての人のための教育としてあるべき姿を示したが、この宣言を具体的に検討する態度を日本政府もメディア側もとってこなかったまま、障害者権利条約が採択され、先進国が軒並み批准する中で、日本で条約に対応するための議論が始まることになった。しかし、その動きも民主党政権と文科省、メディアがビジョンを描けないまま、活発することはなかった。これが 2014 年までの 20 年である。

民主党政権が 2009 年 12 月に障害者権利条約批准に必要な国内法整備に向けて始まったのが、「障害者権利条約の締結に必要な国内法の整備を始めとする我が国の障害者に係る制度の集中的な改革」 とされる「障害者制度改革」。内閣総理大臣（発足当時は鳩山由紀夫首相）を本部長とする「障がい者制度改革推進本部」が設置され、インクルーシブ教育の議論はこの本部に置かれた「障がい者制度改革推進会議」の教育部門の議論から始まった。同会議は 2010 年 1 月から 2012 年 7 月まで合計 38 回行われたが、まずは 15 回を経て第一次意見をとりまとめた、その中で「インクルーシブ教育システム」については「検討を行う」という表現となり、この慎重な言い回しは文科省の消極性を示すものとなった。そして、私が朝日、毎日、読売の３紙を調べる限り、この模様を報じた記事はなかった。

この３紙が「インクルーシブ教育」を報じる最初は、朝日が 2006 年の熊本県版の「障害児教育の専門性考える」であり、毎日が 1999 年の高知県版で「今どき教育学」という不定期のテーマ企画で「インクルージョン　障害児と健常児を区別せず　統合教育とは一線」との見出しで、新しい考え方を紹介。読売新聞は 2010 年 8 月 14 日の社説で、政府の新たな障

害児教育制度が示されたのを受けて「『差別なき教育』全体像示せ」と主張する中で取り上げられている。朝日と毎日が地域の草の根の動きを関心のある記者が取材し書いた地方発で「インクルーシブ教育」が発出された一方で、読売新聞は社説という全く正反対の「新聞の権威」から示され、その中身も政府に対する反応だった。しかし内容としてはインクルーシブの議論ではなく、全体像への注文。この3紙を見る限り、インクルーシブの考えに距離感を置いている印象がある。そして現在もインクルーシブが幾分は浸透したものの、その状況はあまり変わっていないように思う。これを「反省」して前に進めたい、と頭を悩ませている。

メルマガ　ジャーナリスティックなやさしい未来----2019年9月18日　第304号

重度障がい者の「学びたい」の3人の声にどうこたえていくか

重度障がい者向けの学びの機会を作るために何が必要か—。昨年から調査と実践を繰り返しているシャローム大学校の「訪問講義」は、今年は文部科学省の委託研究の枠組みの名中で、これまで実践に取り組んできた東京都小平市のNPO法人、地域ケアさぽーと研究所と共同研究として講義を実施している。この数日、同研究所から訪問する元特別支援学校教員らの授業を受けていた学生らを訪問し、その様子を見たり、私が実際に授業をしたり、現在の学びに対する思いをインタビューし、それぞれの学生の学びへの期待と希望に接した。その言葉に、学びの可能性を実感しながら、現在の学びの展開や拡充、そして、まだ「学びの場を知らない人」への普及をどのようにしたらよいのか、ますます具体的に動かなければならない、と思案している。

東京都小平市の国立精神・神経医療研究センター病院（小平市）の男性は、東京五輪の聖火ランナーになりたい強い希望があり、選考結果を心待ちにしていた。世界に関する勉強が好きで、希望する学習をたずねると、唇の動きが不自由だが、のどからの声をゆっくりと発出し「オリンピックの歴史、それから社会の地図、地理、世界とか日本とか全部、あとは宇宙、惑星とか、あとは、いろんなことば、英語、中国語、フランス語、イタリア語、ポルトガル語、いろんな言葉を勉強して海外に行ってみたい。特にフランス、フランスは美術館とか、あとはいろんな人たち、いろんなスポーツ、わからないスポーツある。たとえばラグビー、テニス、バスケットボール、柔道、水泳、バレーボール。自分の体とか勉強したい」と明確に答えた。学習ではフェイスブックで自分の身の回りであったことを公開することを通じて、自己発信の表現を学んでいる。

東京都江東区の東部療育センターでは62歳の女性が、担当の元特別支援学校教諭の訪問

を待っていた。最近、担当の看護師が異動となり落ち込んだ気分が続き授業が出来ない状態が続いたが、気分を回復させての久々の授業。元教諭は授業で使う数々の道具を両手いっぱいに抱えていた。この受講生が好きな授業は英語。アイパッドの英語教材を使って学習を進める。簡単な文章や単語を４択から選んだり、文章を組み合わせていく授業だ。さらに料理のレシピを考え、マニュアル作りにも挑戦し、最後はエプロンづくりを行うことを約束していて、この日はいくつかの布を用意し、いくつかのデザインの中から最もカラフルなフルーツをあしらったデザインを選んだ。「これが一番明るい色ですね！」と言って、その布を体にあてがうと嬉しそうに微笑む。そして、彼女自らの手で電源をオンにできる装置を使って、ミシンを動かし、エプロンを縫い上げていく。それは確実な「共同作業」。これらの道具はすべて元教諭の私物だが、その１つひとつに学びのための工夫が凝らされている。

東京都清瀬市では 40 代後半の女性が、私が来るのを緊張した様子で待っていたという。どのように自己紹介したらよいのかと思案し、結局は私が到着しても、その自己紹介文の構成中で「自分を知ってほしい」という思いが伝わった。ヘルパーが会話の補助もしてくれていて、壁には韓国の俳優や歌手のさだまさしのポスター、となりのトトロのぬいぐるみ、そして「赤いバッグ」を買うのが趣味とのことで、横になった時の目線の先に見えるように、その赤いバッグが並べられている。この日の授業は元特別支援学校教諭が用意した電子顕微鏡でハエやたまねぎの細胞を見る、との内容だ。科学の実験はドキドキ感があって面白い。見えた瞬間に私やヘルパーから歓声が上がり、ベッドに横たわるこの女性も笑顔がはじける。今回紹介した３者はそれぞれ日常生活には介助が必要な重度の障がいがあるものの、「学ぶ」ことには意欲的で現在、学習支援のボランティアが行う２週間に１回程度の約１２０分授業よりもさらに授業を受けたいと望んでいる。それは権利としても成り立つし、必要であると考えている。どんな形でそれがなしうるのか、ここからが知恵の出しどころだ。

メルマガ　ジャーナリスティックなやさしい未来----2019 年 10 月 9 日　第 307 号

全国で展開する共生社会コンファレンスの可能性を信じて

今年度の文部科学省事業である「共生社会コンファレンス」は全国 6 ブロック地区に分け、共生社会に向けた学びの可能性を広く伝え、自治体への理解や広く市民に知ってもらうのが目的としている。各地区で実施団体が中心となって文部科学省の共催として行う事業であり、それぞれの地域の特色と採択団体のカラーが反映されているから、多様なプログラムとなっている。私は関東・甲信越ブロックの実施団体「一般財団法人福祉教育支援協会」として文科省とともに東京大学教育学研究科を共催にして行う予定だ。研究や実践、当事者を融合させて上で先駆的な取組を紹介しながら、その啓蒙的な効果と担い手を増やすこと

を目指そうとする中で、私たちが向かうべき方向を確認しながら、関係者の思いを集め、形にする難しさを痛感しながらもだんだんと形が見えてきた。

各地の日程と場所はすでに決定済み＜https://www.kyoseishakai-conference.com＞で、日程順では、12 月 1 日に東海・北陸ブロックとして「障害者の学びの場づくりフォーラム IN 東海・北陸」（実施団体・NPO 法人学習障害児・者の教育と自立の保障をすすめる会）、12 月 5 日に東北ブロックの「共に学び、生きる共生社会コンファレンス　東北ブロック」（実施団体・秋田県教育委員会）、12 月 21 日に「○（まる）のつどい～共に考えよう！障害理解の促進、学びの場の担い手の育成、学びの場づくり～」（実施団体・愛媛大学）、来年になって 1 月 1 月 31 日に近畿・中国ブロックの「共に学び、生きる共生社会コンファレンス～障害理解の促進、障害者の学びの場の拡大を目指して～」（実施団体・兵庫県教育委員会）、そして 2 月 14 日に関東甲信越ブロックがあり、最後は 2 月 22 日の北海道ブロック「ともに学ぶ共生社会を目指して～社会教育の実践を通じたコミュニティの可能性～」が予定されている。

私たちが進める関東甲信越ブロックのテーマは「共に学び、生きる共生社会コンファレンス～障害理解の促進、障害者の学びの場の担い手の育成、学びの場の拡大に向けて～」としており、「理解促進」「担い手育成」「場の拡大」を明確に打ち出して丁寧に議論していこうという思いが込められ、それは開催趣旨文の目的部分に反映されている。「第一に、障害者の参加を妨げている社会的障壁や、その解消のための方法について理解を深める（障害理解の促進）。第二に、障害の有無にかかわらず必要な学びが得られる環境を整えるための工夫や考え方の共有を図る（障害者の学びの場の担い手の育成）。第三に、障害者本人の経験やニーズが源泉となるような新しい学びあいの場と豊かな関係性を地域社会に創り出す取組を推進する（障害者の学びの場の拡大）」。これらの言葉を整理するのと同時にプログラム内容が連動するのは当然であり、その当然を効果的に実施するための議論を進めている。

会場は東京大学の本郷キャンパスで、共催として東大も加わることで、障がい者の学びで想起される課題に対して「すべて対応したい」という思いにかられ、結果的にこれまでの障がい者の学習に関する活動や社会運動を踏まえながら、現在の取組を後押しする文脈の中で、「社会教育」「『高等』教育」「重度障がい者向け教育」などの視点のほか、当事者性を意識しながら「『障害』の疑似体験ブース」「当事者研究」「ヒューマンライブラリー」も企画した。さらに難しい議論は苦手な参加者向けには、現在シャローム大学校が地域で展開している「音楽とコミュニケーションのプログラム」を開催、東京大学内を散策する東大散策ツアーも盛り込んだ。結果的に多種多様になったことで、運営側は少し冷や汗をかいている状態だ。とはいえ、冷や汗も「汗と涙」のうちで、その結晶として何らかの成果が出るはずだと確信している。

メルマガ　ジャーナリスティックなやさしい未来----2019年10月16日　第308号

地域福祉の学びを「地域化」するために見えてきたもの

障がいと市民が共に学びあうオープンキャンパスは今年、地方都市で開催し地域モデルの確立に向けて長野県佐久市と静岡県伊東市での開催を試みた。そこで見えてきたのは、福祉の「地域化」に向けた課題である。地域とのつながりを大事にする関係者の熱意に心打たれながらも、現実的には「共生社会」「インクルージョン」を実現するために、地方には地方なりの実情があり対応がある。福祉の領域で障がい者と市民がたどってきたそれぞれの道のりを尊重しつつ、共生社会という次のステージに進むために地方行政がこれまでの措置的な対応から変容するのももちろん大切だが、やはりまだまだ国がメッセージを発し続け、制度化をふまえた見える形での行動が必要だと実感している。

年頭に私は佐久市と伊東市にオープンキャンパス開催の打診をし、文部科学省の研究委託の決定を受け、各市と各市の教育委員会に後援をいただき、各教育機関や福祉事業所、地域のコミュニティへの参加の呼びかけを行った。チラシの郵送やイーメール、そして訪問。地元新聞への記事掲載やコミュニティ FM ラジオへも出演した。しかし、これら当初の私の活動はシャドーボクシングをしている感覚だった。相手がいると想定しつつも、繰り出したパンチ（行動）が当たらないのである。そして同時にその反応は自分なりの解釈として、「障がい者の学び」という新しい概念に戸惑いを覚える心情なのではと推察した。自宅と通所する事業所の往復の毎日と家族との日々が平和に暮らせれば、それも幸せなのかもしれない。しかしながら、私はその幸せを尊重しながら、もう一歩だけ外に出て、新しい世界や仲間と触れ合う機会を作らなければ本当の地域との共生は成し得ないのではないかと考え、それを行動のエネルギーとして、シャドーではなく、誰かを相手にしたいと動き続けた。

結果的に佐久市でも伊東市でも、その相手は見つかり、オープンキャンパスの当日に多くの障がい者と学ぶことが出来たこと、何よりも参加者が「楽しかった」と言ってくれたこと、アンケートにも「またやりたい」との声が書かれたことは次への励みになった。今回のオープンキャンパスは理屈を教える講義ではなく、実感・体感をしてもらうプログラムを中心にした。特に音楽を使ってのコミュニケーションでは全員の体に鈴を体に付けて伴奏をし、プロのピアノコーラスグループ、サームのピアノと歌に合わせたのが面白かった。最後には全員が円になり伴奏しながら、ハイタッチする光景は、新しい人と何かに「つながる」ための学びの形を示せたのではないかと思う。まだまだ改良を加える必要があるが、重度障がいの方でも「学べる」プログラムの開発に向けて確実な一歩だと考えている。

この学びの実感を得たのは、先述の「その相手」に直接に会ってお話をし、こちらの考えを伝え、真意を理解してもらったことが大きい。私がシャローム大学校を広めたいわけではなく、障がい者の学びを作るためのきっかけにしてほしい、共生社会における当然の機会としての学びの場を地域に位置づけるため、私は種を蒔くために来たのです、という説明だ。今年の開催を受けて佐久市と伊東市で障がい者の学びが全国における先駆的な地域モデルとして確立するために、来年も取り組みたいと考えている。来年は東京オリンピック・パラリンピックイヤーでもあり、地域の福祉を「共生社会」の中で、誰もが一緒に、を実現するにはよい契機であるのは間違いない。地方ではまだまだ意識を変える必要があるが、これまでの地域福祉の軌跡の尊厳を保ちながら、新しいステージに行けないかを考え続けている。

メルマガ　ジャーナリスティックなやさしい未来----2019年10月30日　第310号

国旗の「公共性」から考える多様でインクルーシブな対話

シャローム大学校で行っている10月のオープンキャンパスは、本拠を置く埼玉県和光市が2020年のオリンピック・パラリンピックの射撃競技の会場の玄関口になることから、五輪を知ってもらい、玄関口の清掃作業をする「学び」のイベントを行った。五輪のキーワードは多くの国が参加することの多様性であるから、学びの雰囲気を盛り上げるために、会場には万国旗が張られて、その色彩と模様の鮮やかさに、参加者も支援者も楽し気な気分になった。会場が狭いために飾られた国旗はごくわずかではあったが、なかなか難題な国旗もあって、どこの国の国旗か想像するのも楽しい。以前、子供向けに国旗を通して世界を知ってもらうプログラムの開発や、「国旗おぼえうた」なるものを制作した経験から、国旗はその国の文化や地域性が分かると、国旗が示すそれらの色や形は識別の記号ではなく、その国が持つ物語となって鮮明になってくる。だから、面白い、との話を久しぶり語ってみた。

会場で掲げられた国旗は、タイ、フィリピン、マレーシア、インドネシア、イラン、イラク、アフガニスタン、カタール、バングラデシュ、タジキスタン。インドネシアはモナコと同じ国旗なので、それはモナコかもしれないが、アジアの中にあることから、おそらくインドネシアであろう。そんな話もしながら、それぞれの色の意味についての話をしていくと、話している方も楽しくなってくる。障がい者向けの学びの場の中で色から始まる話は展開がしやすい。タジキスタンの国旗はいきなり見せられて分かるほど、日本での露出度は多くはない。国旗の認知度はそのまま日本での関わりあいの深さによって高低するものだが、どれにも等しく尊厳がある。尊厳という言葉は堅苦しいが、本来ならば国旗はそれぞれの国家が民主的な手続きでコンセンサスを得た「公共的なシンボル」であるのが理想と思いつつも、

民主的ではない形で成立している国旗があることも事実だ。

公共への議論は多くの国が辿ってきた道である。日本の場合も1999年の国旗国歌法の成立をめぐっては、太平洋戦争の苦い経験から、戦時中と変わらず日の丸を国旗とするのは認めたくない人も存在したし、今も存在している。私が若手の新聞記者時代にあった戦後50年でも、だんだん衰えつつあるものの戦中派も経験を口にすることで反戦運動はある程度のリアリティを維持しつつ、日の丸に絶対反対の集会も各地で行われていた。戦中を知る人の声は尊く、あの悲劇を繰り返してはならないとの声は力強かった。しかし戦後は遠のき、現在は国際社会でも国内においても、日の丸が公共的なコンセンサスを、完全ではないことも含めて、一般に得られ、「公共」となってきた。だから、この公共である、ということを意識するところから、私たちが自分たちの国＝社会の姿を考えるきっかけになれば、と思う。私たちは五輪を行って、日の丸を公共のものとして考える国民として、どんな社会を作っていくか、という問いである。

この議論の中で、私が考えるのは、偏狭な気持ちで不寛容な姿勢では、公共が隔絶された狭い世界に閉じ込められてしまい、他者を排除してしまう傾向になってしまうことだ。人とモノの移動が活発になり、国境を越えて情報交換が自由に行える現代において、どんな人も同じところで同じように事を行うインクルーシブを基本姿勢にするのは自然な流れである。公共の議論はおそらく、インクルーシブであろうとする自然なエネルギーと一体であってほしいと思うのだが、日ごろ、障がい者雇用や障がい者の学びを実践する立場として直面するのは、インクルーシブに対する「心の抵抗」のような壁である。いつも思うことは、何もかも自然に出来ないだろうか、ということ。障がいがあって「できないこと」は、「あら、そうなの」と言って、当事者本人の希望に沿うように体や頭を動かす。これを特別ではなく自然なこととして、その行動はわたしたちの「公共的」な姿勢として定着できないか。その形の１つとして日の丸も公共の中の一つとして、誰もがインクルーシブに生きる社会のイメージとつながれば、それは行動も伴う公共財として位置付けられるのではないかと思う。

メルマガ　ジャーナリスティックなやさしい未来----2019年11月13日　第312号

学習を「面白く」するために、外国語への衝撃をもう一度

文部科学省事業で全国6ブロックに分かれ行われる「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」は今月開催の東海北陸ブロック（名古屋市）を皮切りに2月まで各ブロックで行われる。東北ブロックでは秋田県教育員会が主催となり12月5-6日開催予定で、私はこの中

で、秋田大学附属特別支援学校の生徒 10 人に対する模擬授業を行なうことになっている。よくよく考えてみると、初対面の生徒向けにいきなり授業を行い、それが来場者の有益な参考になるほどの自信もなく、先日「せめて生徒と交流して当日の緊張感を和らげたい」と秋田に出向き、生徒たちと自己紹介をしあい、自己紹介にちょっとした工夫をしたところ生徒たちは新鮮な驚きの表情を見せた。それは外国語への衝撃とでもいうのだろうか、何気ない私の言動の反応が面白かった。

それは、生徒の名前は名簿で受け取っていたが、「漢字の読み方も正確に知りたいので、教えてください」と話し、ホワイトボードを前にした私は「正確に覚えるためにここに書いていきます」と言い、「だた、ひらがなか英語かハングルのどれか１つで書きますから、言語を選択してください」と話した。それは、ホワイトボードをいくつかな言語で表現することで、「学び」の雰囲気がつくられる、との考えからの演出であったが、これが結構効果的。名前を聞き、言語を選んでもらい、ホワイトボードに自分の名前が英語か日本語かハングルで記される、いや「描かれる」。それを、見たままノートに写そうとする生徒がいる。それを見ていた先生曰く、「普段とは違った驚きの表情を見せていた」というから、予想以上に大きな効果があったようだ。

文科省が政策として推進し秋田県教委が行うコンファレンスは障がい者向けの生涯学習の実現が目的だから、この授業では特別支援学校の高等部の段階から「学び」の楽しさを知ってもらい、その後の「学び」への意欲を高め、同時に教育委員会はじめとする教育行政がその地域での障がい者への生涯学習の場を提供していくという方向性の中にある。だから、まずは学びが「楽しい」「面白い」ものだと思ってもらうのがポイント。この「外国語との出会い」は、高校時代に英語以外の言語と出会ったり、大学に入学して第二外国語が必修になったりの未知との遭遇に「面白い」と思った自分の過去の感覚を参考に考えたもので、異文化に触れることは、何か新しい自分のどこかを刺激することにもある。心の化学反応が次の行動につなげる、学ぼうという意識に向かうわかりやすい感覚は「面白い」なのだと思う。

そんなことを考え教壇に立つ自分は「面白い」の感覚を伝えなければいけな使命を担う。義務教育や大学入試に向けた勉強ではどうしても評価や成績がついてまわるから、面白くなくなってしまう。その記憶のままの勉強では、そのイメージは悪いままになってしまいがち。生涯学習とは、面白いと思えることを学ぶことであり、それは生涯、障がいの有無にかかわらず、求める権利を有するのである。私が障がい者の学びをこの数年、開拓してきた中で、大事なのは「面白い」という感覚。それが学びにつながるのだということを多くの人が当たり前に認識し、場合によっては障がいのある人にも、その道筋を示していける環境を作りたい。秋田県での模擬授業はどうなることか。入場無料です。お近くの方は是非足をお運びください。

メルマガ　ジャーナリスティックなやさしい未来----2019年12月18日　第317号

秋田の優しく温かい眼差しが障がい者の生涯学習を作っていく

本欄でお伝えしていた全国6ブロックに分かれての「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」（文部科学省事業）が12月から名古屋（東海北陸ブロック）を皮切りに始まった。私は秋田市の秋田県生涯学習センターで行われた東北ブロックのコンファレンスの中で、秋田大学附属特別支援学校高等部の生徒向けに模擬授業を行った。これは本欄で事前に生徒たちを訪れ交流した模様を伝えたが、その本番である。授業は参加者が生徒の背後から見る、という設定で行われ、結果的に講義は生徒にも、ほかの参加者も肯定的に受け入れてくれたようで、会場にいた方々は温かい雰囲気で講師の私を受け入れて下さった。授業に積極的に参加していただいた様子も、レクチャーを聞く眼差しも、それはとても親和的な雰囲気で、私に教壇という「居場所」を快く与えてくれように思う。だから、私は最後に「この温かさこそが秋田の生涯教育を実行する上でのかけがえのないリソース」だと熱く語ってしまった。

本番を前に生徒は授業の要望として「コミュニケーションを学びたい」との声が寄せられていたが、正直頭を抱えた。コミュニケーションは広い。30分の模擬講義の中で、最大限の学びの効果と参観する方々が授業として参考になる形を示さなければならないから、非常に悩んだ。これまでの授業の事例を考えても、30分で完成させるのは困難。最終的にはひらめきにも似た形で、開催直前にひらあめいた、「参観者も生徒」の発想に行き着いた。コンファレンスで私の授業を見てもらうという企画意図は、障がい者に向けた生涯学習を実践する立場として、そのやり方を見たいからであり、そのやり方とは、「学ぶ」と「学ばせる」の垣根を作らない、水平型のコミュニケーションを心掛け、カリキュラムづくりをすること。この考えをもとにコミュニケーションの実践として会場の参加者を巻き込むのは、大きな学びとなるはず、との考えで臨んだのである。

授業は冒頭、生徒を相手にしつつもその背後にい参加者にも声を投げかけるようなスタイルで「空気」を作りつつ、私がいつも冒頭に行うオリエンテーションとして「出会いを喜ぼう」「みんなで驚こう　オーバーアクション！」「みんなで笑おう」「『新しい』ことを感じよう」の4つの心がけを説明した。ウォーミングアップの準備体操では参加者はすでに受講者になっている状態だ。講義は映像でコミュニケーションに関するチンパンジーの実験、メディアの歴史として日本アニメの変遷を説明し、クイズへと進む。第1問は生徒がそれぞれ考え回答し、第2問は二人一組で考え、第3問は会場にいる方々に聞きに行くことで答

えを得るという設定だ。すると、会場の人のひとり一人が温かい表情で学生らの質問に応え、4 組に分かれた生徒たちが問いかける先々で温かいやりとりが交わされ、全体の空気がますます和んでいく。講義前に司会者から身に余るような紹介をいただいて登壇する時には、硬い雰囲気だった会場だが、私が登壇した時、舞台から見えた生徒と参加者の印象は「温かい包容」のような空気。これが具体的に何を示すのかは、適切に言語化できなのだが、その空気に私は「今日の講義は面白くなりそう」との確かな感覚を得た。それが私の声音や仕草、雰囲気にも出ていたのかもしれない。そして、生徒たちが会場を縦横無尽に問いかけまわることで、益々その空気は温かくなっていった。

授業後、多くの教育委員会関係者や福祉関係者と「障がい者の生涯学習」する上での大事な考え方を共有することができた。私は、各自治体が教育委員会という領域の中で学校の延長で生涯学習を考えがちなところから、リセットして考えることで見える風景を話した。「誰もが同じ」から始まる発想の上に当事者視点を考慮し、授業を組み立てることを案内した。これは、それぞれの個性に向き合おうとする真剣な福祉事業所と通底する基本方針のようなもので、この方針のもとに楽しい授業にするには工夫が必要であるが、実はこの工夫という実験は面白い。空振りもあればホームランもある。そして、今回感じたのは受講側の「温かさ優しさ」に出会う幸運もある。秋田は「田舎で何もない」などと秋田のみなさんが口にされていたが、いやいや確実にあるその「温かさ」はかけがえのないコンテンツだ。これが明日の生涯学習を作っていく。コンファレンスは関東甲信越ブロックとして、私たちの一般財団法人福祉教育支援協会と文部科学省が主催、東京大学教育学部教育研究科が共催で 2 月 14 日に東京大学本郷キャンパスの伊藤国際センターをメーン会場に行われる。どんなことになるのか。参加申し込みは 12 月下旬から始まる。
https://www.kyoseishakai-conference.com/

メルマガ　ジャーナリスティックなやさしい未来----2020 年 1 月 22 日　第 322 号

オープンキャンパスでの少しずつの前進で見えてくる地平線

2019 年度の文部科学省事業「学校卒業後における障害者の学びを支援する実践研究」は、シャローム大学校での全 7 回の「オープンキャンパス」と重度障がい者向けの訪問講義を中心に行い、先日第 7 回目となるオープンキャンパスを実施し、本事業をほぼ終えた。オープンキャンパスは、障がい者が地域で学ぶために、登壇する人がどのような学びを提供できるのかと、障がい者の方々を学びに導くために情報アクセスをどのように確保するのか、そしてハード面としての場所をどのように確保するのかが大きな課題となる。その課題の解決に向けて取り組んできたオープンキャンパスは今年度で 2 年目だが、昨年度よりも前進

したと思いつつも、やはり前進した分、見えてきた課題も新しい。今年度事業を整理して、2月開催の最終報告会で総括し、最終報告書でも新たに見えてきた地平線のようなものを示したいと思う。

昨年度、シャローム大学校の本拠地である埼玉県和光市を中心に行ったオープンキャンパスは、今年度の取組みとして他地域での開催の可能性を探る事も念頭に、和光市のほかにさいたま市で2回開催したほか、長野県佐久市、静岡県伊東市でも行った。障がい者が生涯を通じて「学ぶこと」が普通にできるようにするために、どの地域でも障がい者が各自治体のほかコミュニティが開催する生涯学習に気軽に参加できるようにするための方策の探究である。この新しい取り組みを2年通じて分かっているのは、「障がい者が学ぶ」ことへの理解と納得へのハードル＝障壁である。特に知的障がい者が「学ぶ」ことに戸惑う人も少なくない。それは「学び」は「勉強する」ことを前提に考えてしまっているからであり、その学びの概念を広く捉えなければ、障がい者の学びへの理解は一歩も進まない。

オープンキャンパスを実施することで知り合い、触れ合った自治体関係者や当事者、当事者家族や関係者、支援事業所の方々の多くはその数だけ、その新しい「学びの概念」について考えたはずだと思う。地域で生きる障がい者が支援施設に通所したり、入所している中でも、それぞれに「学びの可能性」はあるはずで、その可能性をあきらめるのではなく、追究することが、このオープンキャンパスの社会的な役割だと考えている。その役割を全うしようと動いていると、案外福祉領域で支援する側が障壁になることもある。この福祉領域ではない「学び」の概念を入れることに本能的に抵抗を示すケースも見受けられる。おそらく、新たな価値観は管理に支障をきたし、適正な施設の運営が妨げられるとの感覚かもしれない。もちろん、事故なく、リスクを回避することを重点に置く施設の考えも理解はできるが、ここは福祉も「学び」を推進する役割も、当事者視点で考えていきたいと思う。その新たな価値観を共有しようと開催されるのが、2月14日の東京大を会場に行われる「共生社会コンファレンス」である。

このコンファレンスでは文科省とわれわれのほかに東京大学にも加わってもらい共生社会における「学び」を考える予定だ。シンポジウムや当事者の世界を体験できるブース、障がい者向けの歌のワークショップ、専門領域に分かれての分科会が開催されるが、注目してほしい1つがシンポジウムのテーマ＜障害者発・新しい学びの提起―「健常者」中心の学びを超えて＞である。健常者が作り上げたマジョリティの「学び」の中に障がい者を入れるのではなく、障がい者を中心にしたうえで学びを考え、これまでの健常者が中心に作られてきた「学び」への問題も提起する企画である。コーディネーターは日本で初めて聴講生として知的障がい者を受け入れている神戸大学の津田英二教授、発言は東京大学の牧野篤教授、星加良司准教授、そして私が務めさせてもらう。健常者の「学び」への問題提起の場を作るこ

とができたのはうれしい反面、どんなメッセージを出し、そして考えてもらうか、これまでの実践をもとに提示したいと思う。

メルマガ　ジャーナリスティックなやさしい未来----2020年2月12日　第325号

「自分くずし」に向け「生涯学習は面白い」を言えるようになると

先日、甲府市で行われた「青年期における学びを考える会　シンポジウム2020」に招かれ、私は特別講演として支援が必要な人への学びの場であるシャローム大学校の取組みを紹介しながら、特別支援学校を卒業した後の「青年期」の学びの重要性を説きつつ、それは社会全体が生涯にわたる学びの楽しさを実感し共有することが第一歩であると力説した。そう、これはシンポジウムで自分が言いながら熱を帯びて言葉になったものなので、私の中で熟成した言葉ではなかったのだが、これまでの取組みは結局、一緒に学ぶの場づくりは、参加する人が楽しいと思えることが重要で、勉強や学習にネガティブなイメージを持っていると、なかなか行動が楽しくならないのが実感として明確だ。だから障がい者の生涯学習や社会教育を考える上でつくづく「楽しさ」を追究するのは間違いではないと思う。

このシンポジウムでは鳥取短期大学の國本真吾教授が「七転び八起きの『自分づくり』」の基調講演もあり、そこで國本教授は青年期の学びの重要性を「自分くずし」の時間と説いた。つまり、「自分くずし」から「自分さがし」を経て「自分みつけ」に至り「自分みがき」へと移行する、という考え。特別支援学校を卒業し、すぐに就労や福祉事業所への通所に至っても、そこでは一定の作業という役割が与えられ、生活は職場や事業所と自宅との往復が中心となる中でなかなか「自分くずし」が出来ないままとなる。実は、いるかもしれない本当の自分、いるかもしれない何かをやりたい自分、できるかもしれない自分、にはたどり着けないなのではないかと考えてしまう。國本教授の言う「自分づくりの過程の保障」をこの社会はどんな人へも提供しているだろうか、との疑問にも行き着く。

障がい者に限らず、「自分くずし」により新しい「自分みがき」をするのは、その可能性を社会が示すだけでも、あるべき自分に押し込められ方の中には、その押し込められたストレスから解放される気分になるかもしれない。現在、私が文部科学省事業として開発を進めている福祉領域に携わる方が再教育をして広いステージで活躍してもらうためのカリキュラムは、どうしても「研究」とか「再教育」という言葉で硬質なイメージになってしまうが、要は福祉領域で確立している自分を再度の学びで「くずして」、新しい自分みがきへ至るためのきっかけづくりである。それを「面白い」と思ってもらうために、カリキュラムの内容をより活動的なアクティブラーニングを基本としながら、受講者どうしが関わりあい、話し

合い、学びあう場所にしながら進行中である。

学びにはどうしても評価が伴うから、その評価を苦手と思う人は多い。評価されることに拒否反応やトラウマがある人もおり、若いころの「成績」に対するプレッシャーの傷は多くの人にとっては深く、いまだ癒えていないらしい。だからこそ、社会教育や生涯学習でその傷を癒せないかと考えてしまう。前述のシンポジウムで私が口走った「勉強って面白い、生涯学習は楽しいって市民のひとり一人が思えなければ、大きな広がりにはならないと思います」というのは本音で、つまり楽しくすれば、問題は解決できるはず。口走りながら、自分の中では課題が明確になったのだと一人で納得している。

メルマガ　ジャーナリスティックなやさしい未来----2020年2月19日　第326号

共生社会コンファレンスで「共に生きる」ために言葉をつくること

本欄で紹介してきた「共生社会コンファレンス IN 関東甲信越」（主催・文部科学省、一般財団法人福祉教育支援協会、共催・東京大学大学院教育学研究科）が2月14日、東京大学本郷キャンパスの伊藤国際学術研究センターなどを会場に行われた。主催者であり全体を統括する立場としては、まずは事故なくすべてのプログラムが遂行されたことにほっとしているが、やはり支援が必要な人が社会で「学ぶ」こと切り口に展開されたシンポジウム、ワークショップや分科会などで見えてくる課題は、明らかに「今、社会に欠如している部分」である。それを直視することがコンファレンス開催の意義だったと考えている。ここから「言葉」を作る、「言葉」が浮かび上がるのが次への第一歩であり、そこから理解や共鳴、共感が生まれ文化が生じたら、多くの人の安らぎにもなる。その安らぎこそが「アンカーを下す」ことにつながり、学びが安定したものになる、なのだと思う。

コンファレンスは、前半のシンポジウムの作り付けから半年以上前から議論したもので、タイトルは「障害者発・新しい学びの提起―『健常者』中心の学びを超えて」だった。コンファレンスで語られる「学び」がこれまで健常者が作ってきた学びの場に「障害者をどう入れるのか」ではなく、「障害者中心の学びをどう作っていくか」がポイントであり、これは視点の大転換である。シンポジウムのコーディネーターは全国で初めて知的障がい者を聴講生として受け入れている神戸大学の津田英二教授で、シンポジストは、社会教育が専門の牧野篤・東京大教授、障害学の星加良司・東京大准教授、そして私がシャローム大学校学長として務めた。牧野教授は社会教育分野のこれまでの常識に疑問を呈し、星加准教授も障害者からの視点を整理した語り口は「東京大でやっている」感覚になるような、深くクリアな論点整理となり、私自身はその論点の実践例として、そして現場で起こっている話として

「学びの実践」の話に繋げた格好だが、詳細は後日記したい。

この後にはワークショップと分科会の構成としたが、私自身、こだわりたかったのが、多くの当事者を参加させることだった。行政が区別するところの「身体障がい」「精神障がい」「知的障がい」の方々が来て楽しめる、さらにそれ以外の人も同じように交わって学べる場にするための工夫を考えた結果、障がい者を「体感」できる「バリフル・レストラン」の体験ブース、人の語りが本になる「ヒューマンライブラリー」、体を使って音楽を作り上げる「音楽コミュニケーション」の３つを用意するに至った。時間や会場の関係上、同時並行で行っていたので、複数を体験することはできなかったが、開催前からすべて定員以上の申込があり満員御礼となった。この３つはそれぞれの障害にも対応している格好で、特に知的障がい者や重度障がい者に楽しんでもらおうと考えたのが音楽コミュニケーションだった。このワークショップの後には東京大散策ツアーも用意して、初めて会った障がい者同士も交流を楽しんだ様子に、私は悦に入った。

分科会は「社会教育が取り組む生涯学習支援」「『高等』教育におけるインクルージョン」「カフェを介した『共生の学び』の実践」「エンパワーメントに向けた学びのアウトリーチ」「当事者研究がもたらす学び」の５つ。障がい者の学びでは、これまで「社会教育」や福祉事業のカフェなども学びの場として語られてきており、この分野での学びの継続性を発展しつつ、シャローム大学校のような「高等」教育としての学びの視点や、重度障がい者向けの訪問型を推進するアウトリーチ事業、そして精神障がい者らの当事者研究が治療の概念から学びに向けたベクトルで考えるのも、今回の新しい取り組みだと考えている。各分科会後、クロージングセッションで当事者研究のコーディネーターを務めた東京大学の綾屋紗月さんは現在の当事者研究の広がりについて「当事者研究ではそこに言葉が生まれる、その言葉から、また新しいつながり、そして言葉が生まれる」との趣旨の発言した。やはり、コンファレンスは新しい言葉を生む場所なのだと思う。コンファレンスの内容の詳細については適宜伝えていきたい。

（了）